

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和六年二月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十二卷 第十一号（通巻二六三号）

万象

B A N S Y O

二月号

2024. 2



二月の句

春の雪降るふつくらとゆつくりと

細見綾子

能登半島地震の被災地の皆様にお見舞の気持ちを届け致します。

僚誌「風港」の発行所（珠洲市）が被災されたことを知りました。

皆様に日常の戻る日が一日も早く訪れますよう、お祈り申し上げます。

万象俳句会

「ふつくらと」「いい言葉である。」「ふつくらと」「ゆつくりと」と、春特有の牡丹雪の本質をきつちりと捉え、純度濃く単純化した句は他にあるまい。

日々の生活や周辺の自然と向き合い、生きていくことを楽しみ、それを発見することで自然を一層美しいことと思うようになったと綾子は言う。

簡単な言葉で、何の銜いもない瑞々しい感受性によって、数々の句は命の輝きを得て人々に深い感銘を与え、余韻となって心に残る。（句集「牡丹」所収）

（伊藤美音子）

令和六年

二月号

万象

BANSYO

霜葉紅於二月花

(霜葉は二月の花よりも紅なり)

(杜牧「山行」)

万 象

令和6年2月号

名誉主宰作品

雁の列

内海 良太

4

主宰作品

水仙花

江見 悦子

5

風音集Ⅰ・Ⅱ

小林 愛子

中村 千久・福島せいぎ・柳澤 宗正・曾根 満

松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中 愛子

榎本 文代・神田美穂子・井村 和子・前田貴美子

風音散歩⁽²⁰⁾ (二月号)

小林 愛子

10

万象の窓⁽²³⁾

金沢から能登へ

江見 悦子

11

同人作品

江見悦子選

12

同人会だより

同人会名簿についてのお願い

大久保 進

32

12月の「万象」オンライン同人句会高点句

珈琲ぶれいく⁽⁴⁵⁾

.....

33

同人作品の佳句

.....

34

佐 倉

江見 悦子

36

整備士の初便

赤堀 洋子

37

特別作品評 (十二月号)

.....

38

同人作品鑑賞 (十二月号)

.....

39

岩崎 武士

39

中本 清

39

江見悦子自選句鑑賞⑤ 終の垣をしづれり春の雪 倉谷 紫龍 40

句ひ立つ若木や深雪払ふ時 林 陽子 40

「江見悦子句集『砂時計』を読む」(俳誌「初桜」令和五年秋第七号より転載) 41

続・風のしをり② 子規俳句の魅力―初期の作品から(二) 沢木欣一 編集部 42

古典と遊ぼう⑫ 『小右記』拾い読み 内海 良太 43

万象ノオト「跳び箱」 小板橋泰山・安藤美酒々・光岡れい子
石田 睦・関 保子・佐藤 和子 44

巻頭作家(1月号)プロフィール 一由久美子(東京) 久留島規子 46

万象作品 江見悦子・内海良太 共選 47

会費納入のお願い 松浦 陵保 57

「万象」誌の配送について 万象俳句会 57

万象作品の佳句 内海 良太 58

新中央句会報(11月例会) 60

北から南から 敦賀支部のあゆみ(敦賀) 倉谷 紫龍 64

ルビーの小函(二月号) 編集部・校正担当 65

東西南北 66

雁の列

内海良太

(名譽主宰)

柿すだれ村に赤ん坊久しぶり
矢切より渡舟で帰り葱の束

松手入れ了へたる夜の松匂ふ

下総小林牧場二句

養生の馬に新藁届きけり

調教の馬の睫毛に霧の粒

東銀座角の足袋屋のちゃんちゃんこ

雁の列霞ヶ浦で崩れけり

水仙花

江見悦子

(主宰)

括られて小草へ傾ぐ水仙花
聖堂の棟の靈獸楷芽吹く
読み止しのハードボイルド春の風邪
ぶりおこし色紙に鬼怒鳴門と
植木屋の素手雪吊の縄しごく
玉あられ機屋の屋根をまろびたる
雪ばんば金魚の池に見失ふ

枯れ

小林 愛子

(名譽顧問)

残菊やランチョンマットの塵払ふ
家を売る話や蛇は穴に入り
冬晴や音ひびかせて竹箒
郁子の実に夕日乗るころ郵便夫
子ら消えて落葉時雨の滑り台
いつもこの冬木の上を夕鴉
遠吠えの方へ歩めば枯れ深し

ふくと汁

中村千久

(編集人)

白鳥来八海山の高みより
紙垂吹かる秩父風の地藏堂
ふくと汁文字のかすれし下足札
一頁破りし跡も古日記
一茶の忌おやきふはふは食うべたり
待春やモデイリアーニの長き首

新走り

福島せいぎ

(顧問)

色白の弁天さまへ新走り
ゐのこづちつけしころもを畳みけり
高校の柚子取り残し長子去ぬ
猪除けを潜りて妻の生家訪ふ
いちにちを風の音する枯芭蕉
ふくれたる海鼠ころがし料りけり

山茶花

柳澤宗正

(顧問)

山茶花や読経洩れくる茶湯寺
大山の寒氣身に沁む女坂
十二月八日に届く喪のはがき
命綱揺るる天守の煤払
夕映えの煉瓦の遺構雪ばんば
ガス灯の点る馬車道しぐれけり

金縷梅

曽根

(同人会会長)

柊を挿すや嶺風叩く戸に
一山の芽吹き風の淡みどり
金縷梅の咲くや落石響く谷
大富士の裾まで白き建国祭
句座廻るバレンタインのチョコレート
勤行や寝釈迦の顔に日の移る

師 走 来 る

松原智津子

(北海道)

熊笹の野を騒めかせ時雨過ぐ
木枯やサラブレッドの遠嘶き
風花散るイルミネーションの点灯式
着脹れし客引目立つネオン街
ちぎれ雲流るる速さ師走来る

絵 筆

亀田やす子

(栃木)

吊し柿肉桂色に仕上がりぬ
五徳錆ぶ正造生家の大囲炉裏
冬紅葉絵筆を置いてにぎり飯
銀杏散る県庁通りの日差しかな
がらがらと銀杏洗ふ金盥

春 支 度

沢辺たけし

(千葉)

小さき畝笹竹さして冬構
枯菊の燃ゆる火ときに青くなり
打たんとする手風に冬蚊流れけり
雪女赤い耳輪を外しけり
何も彼も二人分なり春支度

初 荷

吉中愛子

(東京)

故郷の姉が寂しと蜜柑来る
柿干して椅子に仏師の仮寝かな
トラックで売る仏壇や能登しぐれ
回るまはる冬木に残る橡ひと葉
膝に立て初荷の松を整へり

冬の川

榎本文代

(神奈川)

縁切寺美男葛の実の真つ赤
ゆるやかな雲見え勤労感謝の日
さんぴらの辛く煮つまり日短か
生葉に長き髭根や冬ぬくし
瑠璃色の羽の一瞬冬の川

末廣亭

神田美穂子

(静岡)

地下鉄を出で黄落の雑踏へ
時雨るるやビル林立の副都心
末廣亭の列に並ぶやおでんの香
時雨傘たたみて寄席の客となる
寄席はねて師走の路地のビストロへ

神渡し

井村和子

(石川)

暗がり坂明かり坂とて帰り花
砂州延びる天の橋立神渡し
吊し干す大鰯厚き化粧塩
寒潮へ遠目差や銭五像
煤払鴨居に母の二尺差し

計のひとつ

前田貴美子

(沖縄)

水底の泥の呼吸や紅とんぼ
とんぼうの水草に縋る翅かげり
残されて茫々とゆく葎の花
那覇まちへ冬星落す計のひとつ
冬菊へとどかぬ指日おもひの濡れて

風音散歩 ②〇（二月号） 小林愛子

トラックで売る仏壇や能登しぐれ 吉中愛子

「時雨」は秋冬の候、急に雨がぱらぱらと小時間降ることである。主として初冬を時雨の季節とし、陰暦十月を時雨月ともいう。盆地に、ことに京都のような地形のところに多く、京都人士によって磨かれた季節感情であった。やがて、人生を逆旅と見る中世の無常観が「時雨」の季語にさまざまな意味や匂いを加え芭蕉の句にも流れ込んだ。人生的詠嘆である「猿蓑は新風の初、時雨は此集の美目」（「去来集」）と去来は芭蕉の心を代弁、蕉門十三名の時雨の句が並ぶ。

「トラックで売る」は鄙びた感じが好ましく、しつとりとした能登の時雨である。一月一日の地震で大きな被害を被ったが、私達は美しい日本の風景をしかと胸に刻んで忘れない。

吊し柿肉桂色に仕上がりぬ 亀田やす子

干柿は、渋柿の皮をむいて天日干しにしたもの、縄に吊るしたのが吊し柿、一個ずつくつたものを枯露柿という。天日に晒すのは渋抜きと保存のためという。表面に白い粉をふいたものが良品、粉はブドウ糖と果糖の混合物だそう。

「肉桂色」が逞しい。天候によるものか品種なのかかわからないが、シナモンをイメージしたところが現代的である。

生薬に長き髭根や冬ぬくし 榎本文代

「生薬」を調べてみると「天然に存在する薬効を持つ産物を、そこから有効成分を精製することなく、体質の改善を目的として用いる薬の総称」とあり、身近にもありそう。

「長き髭根」といえば、素人はまず朝鮮人参が頭に浮かぶ。人参酒にするが、白い髭根はいろいろな形でいかに薬効あらたかに見える。寒さを忘れたような日の暖かさがうれしい。

地下鉄を出で黄落の雑踏へ 神田美穂子

「黄落」は銀杏、樺、櫟、ポプラ、など黄葉した葉が落ちることを言う。紅葉のような艶やかさはないが銀杏並木の街や北海道、郊外などで見るとそれは、明るく絵画的である。

掲句は長い地下鉄を出てきたところであろう。目の前に広がる黄金色のシャワーにあっけにとられている。蔭から光への強烈な反転である。都会生活でのこうした自然とのスリリングな係わり合いもあながち捨てたものでもない。

暗がり坂明かり坂とて帰り花 井村和子

桜、山吹、躑躅などの花が、小春日和に時ならぬ花を咲かせる。これを帰り花・狂咲・二度咲・忘花等という。

「暗がり坂明かり坂」の取り合わせが何と言っても面白い。また「とて」に技を感じる。「明かり坂暗がり坂の帰り花」と比べてみれば一目瞭然である。それにア音を十一も踏んでいるので全体が明るくゆとりのある句となった。

金沢から能登へ

江 見 悦 子

昨年十一月、僚誌「風港」の創刊二十周年記念大会が金沢で開かれ、祝賀会に参加してきました。「風港」の発行所は能登半島先端の珠洲市、のと鉄道が廃止されてからは金沢までバスで3時間かかるそうです。その珠洲市からも大勢の方々が参加され、皆さんの熱気に感銘を受けました。

祝賀会の会場は偶然にも、平成22年10月に「万象」が「百号記念全国大会」を開いたホテル、その時の記念講演者は「風港」の千田一路初代主宰でした。「荒磯雑感―沢木欣一先生と能登」と題する講演は、昭和30年前後の社会性俳句真つただ中の俳壇の状況にも触れながら、欣一先生の「能登塩田」35句を中心に、40年にわたる能登と欣一先生との関わりを熱く語ったものでした。千田氏の氣迫とエネルギーに圧倒されたことを思い出します。（平成23年1月号「万象」誌に掲載）

金沢行きを良い機会に、中能登の七尾に足を伸ばしました。金沢駅から特急「能登かがり火」で50分、七尾駅を出ると、時雨に濡れた能登瓦がつやつやと目に映りました。七尾市出身の作家杉森久英は、エッセイ「ニッポン人を叱る」の中で七尾についてこんな風に書いています。

七尾という港町は、芭蕉の連句集「猿蓑」の中に、凡兆が「能登の七尾の冬は住み憂き」という句を載せているので、どんなひどい田舎かと思う人が多いと思うけれど、実は能登の中心地で、王朝のころ国府があり、国分寺があり、守護の畠山氏の居城があつて、京都からは月卿雲客、文人墨客の来遊が絶えなかった。

杉森久英先生とは、先生を宗匠とする句会で三年ほど一緒したことがありました。

この原稿の初校が済んで年が明けた元旦、大地震が石川県を襲いました。報道の中で、能登の珠洲、輪島、七尾という地名が繰り返される度に心が痛み、「万象」「風港」の皆様の無事を願いました。輪島の火災、ビルや住宅の倒壊、道路の崩壊等の画面に言葉を失いましたが、幸いにも「万象」のお仲間は無事であることが分かりました。地震から6日を経た現在、断水に加えて厳しい寒さが続くようです。被災された皆様が一日も早く以前の生活に戻れますよう、お祈りしています。

同人作品



江見悦子選

○は佳句に選ばれました。

札幌 岡本敬子

白帛に包まれ能登の今年米
畑のもの畑に漉き込み秋収め
酒かけて柿成らぬ地へ柿を干す
群れるもはかなきものや雪はたる
雪の来て違ふ宇宙の在りにけり

札幌 林陽子

朝冷や土蔵の宿の高き窓
萩の庭子規の遺愛の机越し
糸瓜咲いて絶筆三句諳じて
白秋を来て子規の間に名を記す
医学部へ銀杏落葉を蹴ちらして

札幌 落合裕子

東京や墨堤はまだ薄紅葉
身に入むや子規の机に座してみる
夕月や機窓に遠き富士の影
背丈ほどありぬ紫苑の茎真直
撥ね林檎バケツに並べ直売所

札幌 濱谷和代

湖を漕ぐ櫂冷ややかや水脈の筋

浮く紅葉沈む黄葉の足湯かな
照紅葉水琴窟の音高し
山里に薪割る音の木霊して
○木といふ木男結びの冬囲

札幌 大内 和憲

すれ違ふ雪の匂ひの千歳飴
白衣打つ風の切つ先鎌いたち
十指みな蹴みせて搾乳す
○牛飼の背に腰に貼る大懷炉
光るほど銀齒研磨す虎落笛

札幌 紅露 恵子

高く舞ふ一葉黄落とめどなし
一期一会句会の窓の緋連雀
からからと藤の実かたく身を閉し
法要の後の饒舌そぞろ寒
○アトリウムの硝子天井冬青空

札幌 大内 マキ子

農具漁具積まれし出小屋冬に入る
満天の星のなだるる枯岬
拾ひたる貝の名忘れ冬支度

初雪や頼寄せ合ふ子一つ窓
兵卒のままの墓碑銘雪しづる

札幌 中鉢 弘一

荒縄の男結びや冬囲
ひと塩を振りし秋刀魚の眼に力
枯草の根を張る川の淀みをり
冬の夜の館にセロの音優し
寄り添うてベアのマフラー老夫婦

札幌 北浦 詩子

秋の雲高層ビルの玻璃一面
パンプスの踵の減りや冬隣
群れをなす綿虫傘を差すほどに
○荒れ庭に親子狐の巢穴かな
小走りに済ます買物暮早し

江別 佐藤 哲

山の湖さざなみのまま凍てにけり
クラーク像指さす彼方大枯野
寒夕焼からすの群れの鳴きやまず
酒蔵の煉瓦色濃き秋の夕
掠鳥にのぞかれてゐる爺と婆

江別 太田 佳美

早朝の銀杏拾ふ老夫婦
秋晴の長瀨下り鶴は岩に
玉砂利に足を取らるる七五三
黄金の稲穂の波へランディング
捨てサイロ高きを覆ふ蔦紅葉

新潟 高橋 ひろ

茶の花へ夕日とろりと当りをり
家中を総嘗めにして風邪の神
まだ噴いてゐる雑炊へ卵割る
雑炊や硝子戸破りさうに雨
ちゆくちゆくと何処かの枝に冬雀

新潟 高野 松風

○ 秋の風ポスト零るる紙散らし
○ 稽田を一望したる五頭山の裾
秋の水身じろぎもせぬ大真鯉
鬼やんま不意に二階家越えにけり
木犀の香やくれなづむ二階まで

南魚沼 森山 眺湖

薄の穂ほぐれたちまち躍りだす

国道に朝霧詰まる夜明けかな
小鳥来る朝の護摩焚く毘沙門堂
秋蝶の三つ巴すぐ解きにけり
秋の蜂物足りなげに軒めぐる

益子 光岡 れい子

初冠雪どんと構ふる男体山
払ひてもまた唇に雪ばんば
白鳥を迎ふる流れ澄みにけり
銀杏散るひかり寝釈迦へ惜なく
時雨傘ぶつかり合うて陶器市

宇都宮 阿久津 勝利

男体山の峰より故郷冬に入る
霜降の光を纏ふ朝戸風
山霧やダム湖の落す水の音
露の玉始発の車輪動きけり
小春日や青き目値切る陶器市

栃木 上岡 佳子

独り居の畝は短し大根蒔く
夫の忌を修して一人星流る
銀翼のぐんぐん高し今朝の冬

紙懷炉背に貼り合ふクラス会
山壁の影の重なり冬日差す

佐野 増田 幸子

秋空の果てへ枝張るプラタナス
取り壊す駅前食堂雁渡し
そぞろ寒空堀の笹揺れやまず

○チエロ鶴島広子さん逝去低く友と別るる小夜時雨

小春日の機影の白き行方かな

佐野 加藤 季代

石路の葉へ錐のごとくに冬の雨
仰ぎをれば吾に迫りくる冬満月
天上に風あるは神立たれしか
白鳥の来て鴨の来て沼ゆたか
倒影の雲にも乗りて浮寝鳥

佐野 阿部 澄

黄楊垣に残る一縷の烏瓜
枯萩の根方に尽きぬもぐら道
冬うらら今日のランチはシチューのみ
夕散歩団栗一つ踏み当てり
花鋏持つ手に払ふ蚊の名残

稲刈りてたちまちかはる里の朝
栗の実深き緋色に干し上がる

佐野 芝宮留美子

啄木鳥や厨を抜くる山の風
○藍の種採るや残りし花まじり
小枝から小枝地鳴きの冬の鳥

佐野 島田 和枝

返り咲く躑躅の古木女坂
もつてのほか山形訛でもてなされ
山裾に風の生るる芒原
山頂のがれ場に吹かれ野紺菊
どつと翔つ鳩まき上ぐる落葉かな

佐野 売野 緑

面打ちの罌鐐として菊咲けり
啄木鳥に鏝阿寺の森明けにけり
方丈の縁に憩へりいわし雲
「食べるかい」爺の差し出すもつてのほか
我が庭に浅黄斑や秋の風

佐野 店網 洋子

築山の泡立草の抽でて

江戸川の土手の夕日や花真菰
闊歩する寅さんの町菊日和
庭畑の秋茄子に爪立つる猫
藪柑子本丸跡の積石に

足利 大木

茂

取り残す熟柿に黒き鳥の影
松手入れ女庭師の藍の足袋
糶に出す牛の尻押す秋の暮
露けしやダヴィデの星の大使館
野兎の追はるる悲鳴磧道

土浦 澤

照

枝

登山道分つ標や石路の花
山裾の際まで煙る夕焚火
冬野菜棄てある納屋に猫ねまる
名水の里大根干す竿撓ふ
スキップに枯葉の音を刻みたり

加須 茂木

弘

子

水筒の終の一滴秋の野へ
散らしては鯉を遊ばす金木犀
照り返し強き沼の日茨の実

○ジャズ流すキッチンカーや文化の日
鏡池沈む落葉に浮く落葉

さいま 山本 右近

ひたむきに夜の闇削るすがれ虫
木の実落つ音へ木の実を踏みし音
初しぐれ雨脚しかと水際まで
新海苔の一すぢ残る蕎麦の箸
笹叢は風のふところ山眠る

所沢 三好かほる

軒先に柿を吊してなんでも屋
穂すすきや石灰の貨車がながと
新蕎麦やむかし蚕の商人宿
武甲嶺に靄かかりたり冬立つ日
初冬の茶畝刈る音八方に

所沢 南雲 秀子

紅葉狩おにぎり買うて家路かな
溪谷を巡り来りて草風
参道の紅葉明りの石灯籠
石落咲くや一枚岩の長き橋
仏壇へ終の一花の酔芙蓉

千葉 田 中 道 江

白抜きの「たばこ」看板蕎麦の花
鶴はやす木洩れ日浴ぶる孔子像
今年米すこし小粒と手に賞でて
撫牛の鼻面光る菊日和
吉野ヶ里果てからはてへ紫苑晴

千葉 松 浦 陵 保

丹精を込めし林檎のたわわなり
紅葉づれる後樂園の野点かな
瀬戸内の地にも早早寒波来る
冬苺糖度二倍の甘さかな
冬瓜の収穫されず鳥の餌

千葉 喜多恭仁子

墓洗ふ墓じまひには触れぬまま
下校の子狗尾草を摘みながら
菊日和上手にこなす松葉杖
門も庭も桜もみづる旧家かな
立冬の空ま青なり三千歩

千葉 大 月 玲 子

しぐるるや義仲寺小さき門構へ

密に粗に塀の裏まで蔦紅葉
魯田を離れずに行く鉄路かな
老松の乱れを知らぬ落葉山
藁屋根の空重くなる霜夜かな

酒々井 竹 澤 竹 里

囲炉裏端顔赤らめて深眠り
凧や浦に帆を張る帆引船
筑波嶺の雲を蹴飛ばすからつ風
空つ風東に筑波西に富士
ししやも焼く備長炭を赤赤と

佐倉 内 海 保 子

動くもの何か啜へて小鳥来る
対岸の工業団地秋の声
灯台の鉄扉に朱し海桐の実
鉢植ゑの枯菊焚のすぐ終る
冬立つや筑波嶺雲を離さず

佐倉 大内佐奈枝

歩道橋の錆の浮き立つ神無月
文化の日夕日はじく竹とんぼ
萱屋根の潰えしままや木守柿

いてふの葉うらおもてなく黄落す
城下町図書館に売るさつまいも

佐倉 三屋 英俊

御神木色づき七五三近し
賜たける神社縁起の神代文字
雁の道あと追ふ一羽通りけり
○砂時計時を眠らせ冬に入る
立冬や荒行を待つ堂静か

佐倉 横川 良子

地球儀の世界は平和冬薔薇
バス停はビルの地下なり神の留守
柿挽ぐや近くに猿の気配して
切干を戻す合間の思案かな
廃線のレールの行方枯葎

四街道 奥 太雅

国分寺跡の心礎に秋の水
菱紅葉出丸の堀を埋めつくす
走り根を被ふ落葉や帶曲輪
向き同じ正陸・ハリス木の実降る
爪先で突けば応ふ煙茸

四街道 塗木 翠雲

桐の実のワインレッドの色深む
大仏の眼下膝下に秋桜
○子規訪ひし佐倉城址の空高し
白鳥の行方はいづこ欣一忌
交番はいつも留守なり神無月

船橋 山下 良江

雨粒をつなぐ蜘蛛の囀光浴び
日当りよき枝先の柿重たさう
立冬の屋根に声張る大鴉
マスクして待合室に腰下す
引越しの友を追ひかけ秋の暮

船橋 大山 春江

過ぎてより木犀の香の深まれり
をちこちの刈田に白き鳥の影
蒲の穂のこらへきれずに弾けたり
灰白き影を水面に返り花
色変へぬ松のあはひの千木の照り
サフランの淡く咲きゐて濃く散りぬ

船橋 赤堀 洋子

池広く使ひて寂し鴨来る
櫟大樹大樹のままの黄葉かな
撒き餌には寄らず離れて池の鶴
○山柿を啣へ鴉の飛びたてり

船橋 久保村 淑子

小鳥来る小学校のピオトープ
電線をオレンジに染め冬夕焼
十三夜月と木星照り合うて
新しき畳の匂ふ十三夜
課外授業ぞろぞろざわと秋を行く

船橋 片桐 帆 一

火の山に米寿を遊ぶ紅葉狩
家家に菊の花守住む街道
残菊や写真の母はセピア色
縞柄のもんぺ穿く母古写真
ガス灯の明かりの先の鉦叩

船橋 宮本 加津代

水底の空に吸はるる木の実かな
短日や歩行器のまま立つ厨
寄り添ひてやがて別るる秋の蝶

戸締りをためらひにけり星月夜
シャッターに笑みこぼれるて七五三

船橋 中嶋 久登

草紅葉じやんけんに負け右へ行く
白川郷の放水の帯紅葉山
木洩れ日や絵馬に脚擦る冬の蠅
うづくまる芝生の鳩や冬に入る
畦焼や野ねずみ二匹這ひ出せる

柏 山本 とく江

水澄むや咽まで透ける鯉の口
病む夫の寝息確む夜半の月
盛り塩の際立つ白さ冬に入る
続け様に友の訃報や冬桜
気の抜けし柳だらりと冬に入る

柏 内田 郁代

吾亦紅清潔に活け明日館
梅干の壺の口切る今朝の冬
冬浅し乱歩の書斎の大きな椅子
母のごとこつくりと煮る金目鯛
冬三日月明るき道を戻りたり

柏 古川 京子

○立体曼陀羅秋日しづかにしりぞきぬ
出番待つ遠まなざしの祭馬
師の声のまたよみがへる雁のころ
秋夕焼鷗もみあふ帰り船
栈橋の先端に秋暮れ残り
行く秋の沖へ涙を捨てにけり

流山 穂 莉 照 子

○水音に水音を乗せ暮の秋
サフランの花の先までやはらかし
菊花展万の支柱に万の花
神無月杜深深と乾きゆく
魂の抜けたるやうに冬柳

東京 名 和 政 代

石畳 枯 蟪 蛄 の 影 淡 し
防災の粥は匙つき冬に入る
昼灯す画廊の窓辺花八つ手
鐘つけば綿虫ふゆる法隆寺
掛軸の漢詩すどほり漱石忌

東京 藤 田 裕 子

前掛けをはづして庭へ十三夜
貼り終へし障子の内の熟寝かな
別珍の緒の男下駄庭小春
○犬の顔見ての挨拶草の花
こんな時白き猫欲し毛糸編む

東京 島 野 ひ さ

師の墓を離れぬ今日の冬の蝶
岩崎昭乃先生
朝毎に沼をせばむる浮寝鳥
母と子の足漕ぎボート柳散る
ブランコの足先伸びて冬空へ
柿を挽ぐ兄は二階の屋根が好き

東京 加 賀 葉 子

紅葉の便り書き込む日本地図
縁に干す甘藷掘の諸鼠来る
膝小僧こきこきと泣く冬始め
熱熱のクリームシチュー花甘藍
時雨るるや宗匠頭巾の占師

唐辛子赤し佐倉の武家屋敷
東京 久 留 島 規 子

北向きの下士の屋敷や杜鵑草
切株に毒茸生ふる獸道
菊日和となりは赤子連れ帰る
巾着をきつく結んで関東炊

東京 下 嶽 孝 一

笠の列下山の僧に初しぐれ
牛蒡掘る棒立ちといふ小休止
木枯にうしろ歩きの下校の子
連結で進む小春の縄電車
白杖を追ひ抜きかねて赤蜻蛉

東京 杉 浦 一 子

枯葉舞ふ空の明るさ広広と
どこまでも続く青空秋日和
鳥渡る整然と列一列に
くるくると廻る木の葉を目の追へり
夕空へ色鮮やかに落葉舞ふ

東京 草 間 三 香 子

おはしよりの打掛け深紅菊日和
花婿の手持無沙汰や秋扇
髻あとの混ざる冬柿届きたる

実南天まばらや鳥の声しきり
母の年ひとつ越えたり石路の花

東京 岡 村 純 子

裏木戸に蔦の実一つ残りたる
残り蚊を払ふ庭師の紺上着
空深くひかりとなりて鳥渡る
長き夜や原稿用紙買ひたして
寝付かれぬ闇の奥より虫時雨

東京 桑 原 優 美 子

退院の知らせの届く小六月
買い物を忘れて戻る小春かな
閉店の貼紙濡らししぐれけり
灯の入りてにはかに酉の市らしく
スポンジを踏むかに歩く落葉道

東京 三 村 紀 子

菊日和紅白饅頭もらひ受く
はにかみて手締めする子や酉の市
熊手市小判きらめく肩の上
昭和歌謡流るる広場秋時雨
通勤の座席に一つ榎櫃の実

東京 小池 清晴

ちちろ鳴く真昼のテニスコートかな
擦り切れし人工芝や秋の暮
冬瓜のほどよきとろみ母の声
黄に染まる関東平野豊の秋
紫と黄の縫れ合ふ菊脰

武蔵野 砂地 宏子

喧噪の街を見下ろす十三夜
母と吾の窓辺に來り初時雨
雨に散る山茶花の夜や君の逝く
車椅子押す参道に落葉降る
寝付かれぬ耳に北風荒れに荒れ

昭島 正田 華子

奈良墨を摺つて写経や冬日向
堂裏の皇子の墳墓や返り花
大櫓の木肌のぬくき神無月
○分水に錐揉みしたる楓落葉
仕込水一条流る石路の花

町田 広瀬 俊雄

音もなく湧水わたる穴惑ひ

庭木切り空の光の届きたる

裏山の梢高高鵲の声

嫁菜てふいとしき名あり野菊咲く

○土塊を割ればとびだすちちろかな

町田 桔梗 純

○父の幟新調されて里祭

耿耿と星の真中や後の月

柵越えてまろき檸檬の色づけり

弁天池ひと巡りして焼鳥屋

爛酒に昔語りや同期生

日野 喜多尾 明子

卒塔婆のひとつ新し木の実降る

門門の早き日暮や猫を待つ

町内に防犯カメラ鵲の声

○再検は無罪放免りんご剝く

隈取りの貌の精悍鴨来る

赤城山榛名山筑波山も見えて冬に入る

横浜 西本 才子

空の果うすくれなゐを鴨渡る

仏壇へ葉付きの柚子を供へたり

カステラのざらめ噛みしめ冬残し
無人駅銀杏大樹の黄葉散る
運ばれて舌を焦せる牡蠣フライ

横浜 大橋 雅子

朝まだき蜜柑にちちと鳥の声
引越しの友との別れ石路の花
藪柑子旧家の床の黒光り
夕日受く黄葉鎮守の大銀杏
○小春風魚拓貼り出す釣船屋

横浜 山崎 郁子

花芙蓉わらべらの行く通学路
我が庭を優しく照らす今日の月
校庭の砂場の子らに紅葉散る
小粒なれど味良き蜜柑鳥襲ふ
一列に鴉の並ぶ柿の枝

横浜 田賀 煤恵

牛の眸の潤みてゐたり草の花
池の端に揺るる葉先の赤蜻蛉
竹筒に水入るる音秋の暮
実石榴の裂けて朝日に輝けり

星流る夫の魂かと思ふ

横浜 小坂橋 泰山

定型の弔電探す霜夜かな
鍋焼の具を確かめて並べけり
小春日や真打低く語り出す
雪吊や張りしばかりの縄匂ふ
満天の星を磨くや風凍つる

横浜 三木 豊子

手造りの三年味噌や衣被
ひとつ揺れつぎ揺るる柿すだれ
菊日和遅れ来る人待ちゐたり
鈍色の喪服の人や月冴ゆる
秋深し整理の古書を積み重ね

川崎 新妻 奎子

ゆさゆさと葉付き大根抱へけり
大道芸水晶玉に冬日燦
板塀に午後の日差しや石路の花
恙無く今日の過ぎたり炬燵猫
シュレッダーにかくる日記や時雨くる

川崎 大久保 進

一疊の揮毫の飛沫秋澄めり
粗挽きの香りも捏ねて走り蕎麦
山眠る人家へ続くけもの道
冬めくや手首を返す鍵の音
しぐるるや川崎宿の団子茶屋

鎌倉 恒川 清爾

なほ力なきと八冠秋高し
園児バスペンキ塗り替へ冬に入る
冬めくや珈琲豆を深く煎り
ダンディと言はれし兄貴冬帽子
初霜や雑布しかと絞りたる

横須賀 織田 みさゑ

○身綺麗に暮す余生や金木犀
思ひ出す事も供養やちちろ鳴く
何もせず風音聞いて夜は秋
故郷の味しみじみと今年米
桔梗や来る日来る日の恙なく

伊勢原 佐藤 和子

野仏の口一文字藤は実

山畑に拾ふ一粒くぬぎの実
杖同士十月桜に歩を休め
鴉色の丹沢の空鳥わたる
狩野川の蛇行にひかる枯尾花

静岡 大村 峰子

産土神に昼の灯や初時雨
秋蝶舞ふ母の紬の色の舞ふ
熊笹を抜けて来る風秋の声
○リヤカーに落葉山積み禰宜の朝
通草採る空諸共に引き寄せて

静岡 海野 みち子

座せばすぐ絡まる猫や冬隣
式部の実枝垂るる中に猫の貌
電線の鴉威しつ柿吊す
露座仏へ径を塞げり葛の花
紅葉狩湖の吊橋潜る船

静岡 宮崎 知恵美

野仏へコスモスの風透きとほる
柵越ゆる白山吹の実の黒き
鶏頭や茅葺屋根の外流し

青空や水引草の赤極め
遠富士や香りの強き秋の薔薇

静岡 岩崎 武士

○バトン・トワラー片手で秋を回しけり
赤石岳は晴れて聖岳は秋時雨
鴉二羽鷹追ふ空の青さかな
もんがの棲む神名備の闇深し
稽田のひかり啄む鳩の群れ

静岡 望月 敏男

鯉の背を集めて水の澄みにけり
初鴨の橋の暗みを潜り抜け
ガス燈の点る濠端一葉忌
受付へ背筋伸ばして敬老日
鳥帰る農小屋に貼る世界地図

静岡 藤原 千代子

稲刈や腰に結へて藁と鎌
稲刈の後を啄む鷺一羽

○新藁の日の温もりを積み上ぐる
玉入れの済みたる空へ秋茜
一夜^{ひとよ}さの雪頂に富士近し

静岡 荻野加壽子

スカートの裾の湿りや木の実降る
色変へぬ松の一樹の隠れ疵
文句無き富士の全容文化の日
結局は外すネクタイ新走り
前掛けに拭ふ指先一葉忌

静岡 小川 明美

猪除けの柵の中なる女郎花
穴惑ひ庚申塔の石垣に
蛸の声浴び鍬を振りにけり
出番待つ稲棒三本づつの東
○秋うららピエロの鼻の転りぬ

静岡 藤本 節子

文字小さき母の文読む夜半の秋
柿百顆夕日に色を深めたり
新蕎麦や昔駅舎の木のベンチ
稲架襖たちまち暮るる峡の空
木犀の金散り散りに鯉の池

静岡 大長 文昭

一本の野菊に日矢の強きかな

花茗荷伏流水のとめどなく
秋惜しむ薬師如来へ山の風
芋茎干す山くろぐろと連れる
鵄猛る国師生家の鎮もりに

静岡 加山ひさ子

身ほとりの塵を叩けり秋の暮
声弾む日曜学校木の実降る
どんぐりに足を滑す墓の道
桐箆箆に父の袴とインバネス
○度忘れをごまかしてをり林檎剥く

静岡 石川裕子

足場組む金属音や冬隣
秋の灯や父の書棚に銀の匙
形愛で香りを愛でてラ・フランス
子に語る昔の話おでん鍋
二人居の静かな夜や葛湯とく

静岡 本多ひとみ

念入りに洗車勤労感謝の日
冬うらら頬杖つける観世音
冬川や流るるものに葉ひとひら

川音や土手に一輪水仙花
せせらぎに冬青草の揺れてをり

静岡 杉澤修

木洩れ日に道譲り合ふ紅葉谷
無住寺に金木犀の風迎ふ
前山を呑み込む霧の速さかな
秋としジャズの流るるカフェに猫
校門にこぼるる陽射し銀杏の実

射水 成瀬真紀子

秋時雨老舗に昆布煮る匂ひ
等伯の地や糠雨に鵲の声
冷まじや池に白樺骨と立つ
秋深し画布に穂高の盛り上がる
池底へ雪嶺深く突き刺さり

金沢 中條睦子

月光を浴びきて寝落つ旅づかれ
上着脱ぎ秋暑の街を欣一忌
語り出すことば奪ひて秋の雷
○捨てらるる物小春日に影もちて
雪螢寺領を出でて湯屋の前

金沢 今越みち子

○厚物の菊金色に欣一忌

石路の花蕊を囲みて虫集ふ
サイクリング桜冬木の影を踏み
新蕎麦を打つ間山家の句会かな
小雪や薄紅色の薬湯に

金沢 伊藤美音子

黄葉散る己が光を追ふやうに
色変へぬ松を叩きて雨去りぬ
醤油屋の裏に抜け径棗の実
身に入むや髪の花まで灸の香
仕出し屋の湯気の豊かに冬来る

金沢 高田たみ子

立ち込むる灸の匂ひ冬隣
銀杏散る白き土蔵をまぶしめり
蔦もみぢ火縄のごとく這ひのぼる
炭焼のむじな生け捕る話など
傘叩く霰の音に歩を早め

金沢 豊田高子

切株に茸わらわら日照雨来る

檻樓のごと産卵終へし鮭浮けり
円安の話も混りおでん鍋
冬霧の飛んでダム湖の黙深し
宮鶏の翼大きく神無月

金沢 松井佐枝子

冬紅葉堀をゆつたり屋形船
天守より湖広広と小春かな
参道の千躰地藏散紅葉
持国天の腰のひねりや日短
○残る蠅さ迷ひありく窓明り

金沢 石川純子

雁の棹先頭替り遠ざかる
しづるるや両手につつむ筒茶碗
おみくじの筒振る音や小六月
石膏像冬日を弾く白さかな
再会の笑みのこぼるる室の花

金沢 河野尚子

耶蘇谷へ降るるきざはし木の実落つ
モネ展へ上野の森の落葉道
加賀富士を遠見のくらし冬に入る

誰もみな笑顔となつて七五三
神名備の森に木洩れ日鹿の声

金沢 道場 啓子

猫避けて転し来り今年米
淋しらに山の出で湯のちちろ虫
降りそそぐ天使の梯子刈田道
暮早し生徒の白き膝小僧
やや寒のリビング深く日の差し来

内灘 塩井 志津

秋水や時にかがよふ鯉の鰭
喪にこもる門前の萩真つ盛り
仏壇へ夕月の窓開きけり
深秋の太棹に聴く古謡かな
永遠に昂かがやき人は逝く

七尾 谷 渡末 枝

大根引能登に三日の晴れ間無く
白鳥の声杉山の秀を掠め
○ 渴膨む万羽の鴨の寝静り
海暮れて風垣風に鳴るばかり
初冬の音撥ね返す手織機

敦賀 倉谷 紫龍
螻蛄鳴くや父のほしいと泣きし日も
千日行のきびしき径や鹿の声

焼け石へ数珠玉ひかる製塩あと
大寺の六千坊や赤のまま
万葉の里へ秋虹雨あがり

敦賀 倉谷 ます美

学生の声へ近寄る若き鹿

新築の瓦欠く音秋高し
シート干す眼へ真青なる空の秋
山裾の穴地藏の灯赤のまま
病院に魔除南瓜やハロウィン

敦賀 鶴田 勝子

鹿の目の闇に光るや通夜帰り
手際よく仕上ぐる畳菊日和
螻蛄鳴くや川決壊の跡未だ
草の実とぶ駄まで急ぐ畦のみち
文字走る千畝の査証秋深む

敦賀 中川 雅月

落花生莢振る音の煎り加減

ひよんの笛吹きて翁の長き髭
去来忌や「不易流行」繙きて
黄昏れて妻恋ふ鹿の囁れ声
蕉翁の伊予青石の秋の句碑

敦賀 中 村

優

雀群れ天水鉢の初水
草河豚に餌取られたるふくれ面
螻蛄鳴くや嫁ぎしままの子供部屋
登山口祠の供花も赤のまま
追分の一町地藏秋微雨

大阪 入 山 繁

幸

畦に沿ひ轍に沿ひて穠かな
黄昏の底灰白き蕎麦の花
懐しき人と出合ひぬ返り花
○冬暁や全窓灯し連絡船
牡蠣船の泊つや浪花の淀屋橋

徳島 福 島 吉 美

松明の燠をこぼせり鵜飼船
川船の宴会に盛るきぬかつぎ
○さやけくて框拭き込む糠袋

沿道に大根振りて応援す
宴会の名刺に添ふる阿波酸橘

徳島 村 上 和 義

絡繰の農村舞台小鳥来る
今もなほ湧く酒蔵の水澄めり
おちよほ口紅のはみ出す七五三
○八十路とて新しき日日障子貼る
抜ん出て黄の色灯す石路の花

徳島 宮 西 修 一

窓開けてゴーヤの風を入れにけり
十羽来て百羽で帰る稲雀
鶴鶴の叩いて渡る下城橋
捨てられし外車の屋根に積む落葉
踏ん張つて踏ん張つて抜く大根かな

徳島 平 岡

功

母郷訪ひ枝つき柿を貰ひたり
電柱を一縷伸びたる蔦紅葉
バス停に客待つ余生捨案山子
座敷童棲むてふ遠野馬肥ゆる
沈下橋夕日の中を秋廻路

石井 木内 マヤ

影だけを残して逝けりヒロシマ忌
ヒロシマ忌地獄の上にある平和
身に沁むや色無き写真資料館
瀬戸の秋灯台昼も点滅す
「G線」といふ喫茶店秋探し

小松島 岡田 あゆみ

手から手へ句座を一巡ひよんの笛
木の実降る俘虜の遺せしアーチ橋
本返しまだ借りてくる夜長かな
百度石の影謐かなる十三夜
不気味とも美しきとも臭木の実

室戸 安岡 みさき

ワンカップ開けたるままや神の留守
結界の幣のちぎれし神の留守
御手洗の水涸れてをり神の留守
手に余る菊を頂く市長賞
手で割りて二人で分つ熟柿かな

長崎 丸本 祥夫

遠くより寺の鐘鳴る柿すだれ

盆路の帰りの遠し石畳
原潜へ目玉揃へり鯊の群れ
重たげな雫払へり花芙蓉
秋の日や猫の毛艶のしなやかに
西海 山下 敦子

鵲高し杖はこつんと地を突けり
冬木立つ光の面に背を預け
線香の灰になる間や初時雨
空の青きゆつと凝縮冬来る
欲といふもの無くなりて葱刻む

那覇 大湾 宗弘

立冬を逝けり泡盛古酒一箇
水かげろふ揺れて海鼠の潮溜り
冬青空相方積みのかつちりと
冬麗や雲は西方へと流れ
冬の水真鯉ますます黒くして

那覇 中本 清

海に背を向け一枚の二期田刈る
友逝きし里よ芒はほどけたる
蒲の穂の弾け掌むずむずす

小夏日や摺り足狭き組踊
村井戸の畦に冬蝶乱舞かな※小夏日……沖縄で小春日を言う

西原 宮 城 勉

登高や杖に手力足しに足し
冬晴の槌音かたき城普請
〇落鷹に挑みて追ひぬ群れ鴉
翹立てて祈りに入るか冬の蝶
風音の尖る畑道甘蔗穂出づ
冬霞響き波なす夕の鐘

ベルン 鈴木 波 江

〇鎌パン食むや狭霧の港町
満潮の波音かすか星月夜
北海の風鳴る空を雁渡る
貝採りに屈む水漬袖に拭き
引き潮の沖の曇天冬の虹

万象基金のご報告

匿名 一〇口
松浦 陵保様 一口

〔令和5年12月1日〜12月31日・受付順〕
〔万象〕の発展のため、大切に便わせて頂きます。万象俳句会

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2024年2月号

特集 俳句評論ノススメ

〇巻頭〜俳句評論ノススメ 岸本尚毅
〇俳句評論へのステップ 青木亮人
〇私の評論執筆法
今泉康弘 岡田一実 池田瑠那
〇名俳句評論ベスト3
坂本宮尾 筑紫磐井 依田善朗

グラビア 俳句界NOW 西山睦

特別作品21句 佐藤文香〔翻車魚〕

特集 猫と俳句

〇俳人はなぜ「猫」を詠むのか 堀本裕樹
〇猫俳句コレクション30 西村麒麟
〇私と猫
権未知子 倉阪鬼一郎 土肥あき子
堀田季何 仲寒蟬 家登みろく

発表！第14回北斗賞 選評受賞の言葉ほか

*セレクトジョン結社 「波柿」安原谿游

私の一冊 山下幸典「河内野」

対談 佐高信の甘口で「コニチハ」
久堀文（井藤士）

「俳句界」投稿欄 一流道者13名！
日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。



株式会社 文藝の森

お求めは……☎169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

同人名簿についてのお知らせ

「令和6年版万象同人名簿」(令和6年4月1日現在)

の作成に着手しております。

つきましては、お手許の「令和5年版 万象同人名簿」記載の同人の住所、電話番号、メールアドレス等に誤りや変更がある場合、また「万象」句会一覧については「万象」誌令和5年12月号掲載の一覧表に変更のある場合は、令和6年2月末までに同人名簿事務局、大久保進までご連絡頂くようお願いいたします。

また、個人のメールアドレスをお持ちの方は出来るだけ登録をお願いいたします(大久保進にメールでご連絡下さい)。

変更や登録のご連絡がない場合、令和5年版の記載を踏襲することになりますのでご了承下さい。

なお、「令和6年版 万象同人名簿」は「万象」誌5月号同封での配送を予定しております。

皆さまのご理解とご協力のほどお願いいたします。

【連絡先 同人名簿事務局 大久保進】

電話番号 044-3333011054

メールアドレス fwkx0296@nifty.com

同人名簿事務局

12月の「万象」オンライン同人句会高ポイント

- | | | |
|---|-------------------|------------|
| 6 | ふくと汁文字のかすれし下足札 | 中村 千久(志木) |
| 5 | 日を返す力ありけり冬青草 | 荻野加壽子(静岡) |
| 4 | だるまさんがころんだつ、ツと落葉 | 大久保 進(川崎) |
| | 雁の列霞ヶ浦で崩れけり | 内海 良太(佐倉) |
| | 猿山の冬日動けばみな動く | 穂刈 照子(流山) |
| | 置物のやうに翁の日向ほこ | 下嶽 孝一(東京) |
| | ちやつちやつと陽ざしを囁す簀子かな | 岩崎 武士(静岡) |
| | 立ち上げの遅きパソコン十二月 | 宮西 修一(徳島) |
| 3 | 冬耕といふ程もなし畑十坪 | 宮西 修一(徳島) |
| | 寄生木の毬をあらはに枯木立 | 奥 太雅(四街道) |
| | 木枯の吹き残してや星ひとつ | 下嶽 孝一(東京) |
| | 一時休戦途切れし夜や寒波来る | 北浦 詩子(札幌) |
| | 冬の蠅牛の睫毛へいく度も | 穂刈 照子(流山) |
| | 一茶の忌おやきふはふは食うべたり | 中村 千久(志木) |
| | 山々に淡き残照蓮枯るる | 神田美穂子(富士) |
| | 老眼鏡みがく勤勞感謝の日 | 山本とく江(柏) |
| | 霜晴や段々畑に山羊の声 | 岡村 純子(東京) |
| | 喪の家の庭に山茶花散りに散る | 砂地 宏子(武蔵野) |
| | 賑やかに鼓門打つ初霰 | 大木 茂(足利) |
| | 動かぬと思へば動く海鼠かな | 荻野加壽子(静岡) |
| | 雪女赤い耳輪を外しけり | 沢辺たけし(流山) |

(* 句頭の数字は点数を示しています)



今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所に同じ漢字を入れてみましょう。

- | | | |
|----|------------------|--------|
| 1 | □ 山の□より白し秋の風 | 松尾芭蕉 |
| 2 | □ 虫の□のこぼるる櫛の枝 | 沢木欣一 |
| 3 | 大空に□の雲地に□の草 | 高濱虚子 |
| 4 | □になり□になりきつてしまはずに | 細見綾子 |
| 5 | 名ある□春□としてみなうるむ | 山口誓子 |
| 6 | □の上に浮ぶや□の吉野山 | 長谷川 權 |
| 7 | 夏霧の□より湧きて□に去り | 鈴木真砂女 |
| 8 | □んづけてまた□んづけて落葉籠 | 内海良太 |
| 9 | しぐるるや麻布二の□三の□ | 久保田万太郎 |
| 10 | □ 始□の形の国なれば | 藤田湘子 |
| 11 | 彼一□我一□秋深みかも | 高浜虚子 |
| 12 | 赤い□白□と落ちにけり | 河東碧梧桐 |

【正解】

- | | |
|----|---|
| 1 | 石 |
| 2 | 鈴 |
| 3 | 春 |
| 4 | 冬 |
| 5 | 星 |
| 6 | 花 |
| 7 | 海 |
| 8 | 踏 |
| 9 | 橋 |
| 10 | 弓 |
| 11 | 語 |
| 12 | 椿 |

思い出す人々

西山 厚 全24回

第12回 【山口誓子】

父が徳島大学に勤めることになり、わが家は東京から徳島に引っ越して、私は生まれた。

やがて父は皇学館大学へ移ることになり、わが家は徳島から伊勢に引っ越した。

そして山口誓子を知った。療養のため四日市に居を移した誓子は、伊勢にも足を延ばし、伊勢を深く愛した。句碑が建ち、近年、山口誓子俳句館もできた。

父は、時折、誓子の句をつぶやいていた。

学問のさびしさに堪へ炭をつぐ

父は学者だった。わが家で調べ物をしたり思索にふけったり原稿を書いている父の後ろ姿は、今も目に焼き付いている。

父は子煩悩で、私は父にとても可愛がられたが、そういう時の父には決して近づいてはいけなと、母に言い聞かされていた。

昭和20年（1945）、誓子は空襲で一切の蔵書と家財を失った。二年後、近所からの出火で、父も一切の蔵書と家財を失った。

学問はさびしい。きびしいのではなく、さびしい。

同人作品の佳句

江見悦子

牛飼の背に腰に貼る大懷炉 大内和憲

北海道の冬、酪農に携わる人たちの朝は早い。朝夕2回の搾乳は自動化が進んでいるとはいえ、乳牛の乳房を綺麗にすることから始まる重労働である。その牛飼の背にも腰にも大きな懷炉が欠かせない。どのくらいのサイズの懷炉を貼っているのか。牛飼の労働に寄せる思いを「大懷炉」で表現した俳味のある一句。

アトリウム硝子天井冬青空 紅露恵子

「アトリウム」は、屋内に設けられた中庭状の天井の高い空間のこと。大空間のある美術館か、室内植物園か、ガラス張りの高い天井を見上げると抜けるような青空が広がっている。北国には珍しい快晴の一日、吸いこまれるような青空に作者の心は晴れやかだ。視線が上へ上へと上がっていく気持ちの良い句。

鍋島広子さんと逝去

チェロ低く友と別る小夜時雨 増田幸子

佐野の鍋島広子さんが亡くなられた。増田さんにとって、「風」以来の俳句の先輩であり、お仲間だった方だ。通夜から戻り、チェロの音色の中でしみじみと在りし日の鍋島さんを偲んでいる。季語「小夜時雨」がまた、悲しみに寄り添っているようにも感じられる。

子規訪ひし佐倉城址の空高し 塗木翠雲

千葉県佐倉市は、江戸時代、堀田家の十一万石の城下町として栄え、現在は佐倉城の城跡一帯が広々とした城址公園となっている。城の建物は現存しないが水堀、土塁、馬出し、空堀等に往時の面影を残している。元氣だった正岡子規がこの地を訪問したのは明治27年12月、日清戦争が始まった年である。(常盤木や冬されまざる城の跡)が句碑として残っている。この年は中村不折に教えられた「写生」の意識が、子規に芽生えた年でもあった。掲句の季語「空高し」は、俳句革新に取り組んでいた子規の意氣軒昂たる姿をも感じさせる。立体曼茶羅秋日しづかにしりぞきぬ 古川京子

密教の教えを絵などで表現したものが曼茶羅だが、空海が構想した立体曼茶羅は、東寺の講堂に二十一体の仏像を安置して浄土の世界を具現化したもの。時を忘れて立体曼茶羅の世界に身を置いた作者が講堂を出ると、秋の日が翳り始めており、それを「しりぞきぬ」と表現した。主観的な表現に、静謐の中に心を澄ませた作者の姿が見える。

犬の顔見ての挨拶草の花 藤田裕子

筆者の住む地域でも、朝に夕に犬の散歩をする方々をよく見かける。「犬友達」と言うらしいが、集まって挨拶を交わしている。この句、まず犬の顔を見てから、飼い主が交々挨拶するというのが可笑しい。飼主は「○○ちゃんのお母(父)さん」という立場なのだろう。季語「草の花」が犬の目の高さのようで面白い。

父の幟新調されて里祭 桔梗 純

「父の幟」は、亡くなられたお父様が神社に奉納した幟の

ことだろう。しばらくぶりに帰省した故郷の祭で、昔の幟が新調されて旗竿に掲げられていることに気が付いた作者。お父様は産土の神社にとって大切な人物だったのだろう。父を誇りに思う気持ちは、地域と共に歩もうとする産土の神社に對する信頼感でもある。

再検は無罪放免りんご剣く 喜多尾明子

家族の一人が健康診断を受診し、再検査を告げられた。やむを得ず受けてはみたものの、その結果が出るまでの時間の長い事、何とも落ち着かない日々が続いた。ようやく心配することはないと診断がついて一件落着した。「無罪放免」の四字熟語が面白い。安堵して林檎を剥いている作者。

身綺麗に暮す余生や金木屋 織田みさゑ

綾子先生の〈硝子器を清潔にしてさくら時〉の句を思い出した。現在の生活を「余生」と表現し、だからこそ身綺麗に暮らしたいと思ひ実践している織田さん。ちょうど金木屋が橙黄色の花をつけ、芳香を漂わせている季節だ。

バトン・トワラー片手で秋を回しけり 岩崎武士

バトン・トワラーとは、バレードや音楽隊の先頭に立ちバトンを操りながら指揮をとる人のこと。この句、バトンを手に持つてくると自在に回す姿を、「片手で秋を回し」と大胆に表現した。笑顔のトワラーの明るく軽快な動きに、秋の爽やかさを存分に感じる。

度忘れをごまかしてをり林檎剣く 加山ひさ子

誰でもが思い当る「度忘れ」、頭の中に何か引つかかるものがないかと思ひを巡らしてみることがどうしても思ひ出せない。その時の気持ちと言ったら。林檎を剥いてごまかしてはみる

けれど。そんな微妙な気持ちを句にした力量に感服。

渴膨む万羽の鴨の寝静り 谷渡末枝

上五の「渴膨む」におやつと思わせ、中七に「万羽の鴨」と置き、座五で「寝静り」と種明しをしている。作者の住む中能登の、渴に渡って来た鴨の情景だろう。寝に付いた作者が五感を働かせて詠んだ句とも思われる。谷渡さんが今年上梓された句集「微風」の中の〈しろがねの月夜山河を音の闇〉に思ひが飛んだ。

八十路とて新しき日日障子貼る 村上和義

助詞「とて」には様々な意味があるが、この句の場合は「……だけあって、……なので、……であるから」にあてはまると思う。八十歳を過ぎ、新しい日々を迎えようと障子を貼っている作者。貼り終えた部屋は見違えるほど明るく、心も弾む。八十路を元気に前向きに過ごしていかれるに違いない。

落鷹に挑みて追ひぬ群れ鴉 宮城勉

小熊一人の「沖組俳句歳時記」の「鷹渡る」の項に「落鷹」の説明がある。負傷のため群から外れた一部の鷹を「落鷹」「迷ひ鷹」「ゆらり鷹」というのだそうだ。鷹は日本には二十数種が分布している。通常は鷹が鴉を捕食するが、時に鷹の様子をみて鴉の側から鷹に意地悪をすることがあるという。掲句もその場面を詠んだものだろう。渡りの列から離れた落鷹が鴉に追われる姿の哀れさが胸を打つ。「挑みて追ひぬ」とある表現はやや説明的なので、動詞を一つにしほってみる等、推敲して欲しい。

佐 倉 赤堀 洋子

摩崖仏美男葛の実を裾に
土竜塚銀杏落葉を持ち上げて
絡みあひ堀にしだるる冬柳
棉吹いて地に届くまで下がり
手毬花狂ひ咲きして歴史館
凍て柿の皮を残して鶉つつく
足音に鶉の羽搏ちの始りぬ
池の縁早や菰卷の松大樹
睡蓮に残る黄葉や姥が池
武家屋敷の厨口より雪螢

歴史と今を見ようと、句材の多そうな佐倉を詠むこととした。実際に見た現在の佐倉でまとめたが、自然だけでなく、神社、植物園、歴史館、武家屋敷等々句材も多く、自然と歴史に触れることができた。また、句には入れていないが、堀で見た特定外来生物のオオフサモは繁殖力がすごい。まだ落葉が続く堀で青青と広がっていた。自然を大事にすることも心せばと思った。



整備士の初便

松浦 陵保

整備士の職場明るし去年今年
初日の出空の安全誓ひけり
年の酒タイヤに注ぐ一番機
ドア開けて機内に満ちし淑気かな
元旦の機体に点す明りかな
整備終へサイン記すや初日誌
乗員と御慶交して日誌継ぐ
初春のエンジン始動癖も無く
初旅へ心を込めて送り出す
初空へジャンボ機緩く離陸せり

工業高校電気科卒業後、
航空会社に入社して五十年
遂に卒業の時を迎えた。
第一次オイルショック後、
憧れと将来性を見込み、選
んだ整備士の仕事を続けて
こられた事を誇りに思う。
第一線の発着整備の職場
は常に活気に満ちており、自
分の整備処置がお客様や乗
員の安全と命に直結してい
る。無事に飛び立ち着陸し
た時の安堵感は一入である。
最後は若き整備士を養成
する職場で多くの訓練生に
恵まれた。お客様に安全と
安心を届け続けて貰いたい。



冬の虹

三好かほる

「写生」と「出会い」を大切に、句作りをしたいという作者。近くにある名所を巡った十句である。

玉虫の青きを拾ふ遺跡徑

縄文の「遺跡徑」で、「玉虫」を拾った。「青きを拾ふ」がいい。この玉虫は、縄文からの使者かも知れない。

秋灯し遺愛の胴乱錆びしま

牧野富太郎博士の「遺愛の胴乱」が「錆びしま」展示されている。「秋灯し」が、博士を偲ぶ作者の心である。

栗飯を炊いてはらから集ひけり

長き夜の書齋に灯す絵蠟燭

一句目、「栗飯」に「はらから集ひ」が、一族の親密さを表出。いい結びつきの同胞と想像する。

二句目、「長き夜」を「書齋に灯す絵蠟燭」とは、なんと

優雅で、静かな生活であろうか。絵蠟燭の温かさがいい。

行く秋の藍の種干す薬草園

薬用植物園で的一句。「藍の種干す」に作者の確かな目を感じる。「行く秋」の中、「薬草園」は種の収穫時期である。

弘法の塔の真上に冬の虹

「弘法の塔」の「真上に」、儂く美しい「冬の虹」が架かっている。この冬の虹は、弘法大師様の想いの虹だろうか。経験豊富なきめの細かい十句である。これからも「写生」と「出会い」の佳句をお願いしたい。

沖縄に思ふ

恒川清爾

戦後78年、夏の沖縄の今を訪ねた十句である。作者の「沖縄に思ふ」の心を追ってみる。

沖縄や酷暑の石に死者の銘

沖縄の夏は厳しい。灼けつく「酷暑の石」に「死者の銘」が刻まれている。この悲惨な現実。読んでいても石の銘に合掌の思いである。沖縄の夏の深い悲しみが胸を打つ。

六月や摩文仁の丘の海青き

沖縄戦は、昭和20年6月23日に終わり、住民数十万人が犠牲になった。最後の激戦地が「摩文仁の丘」である。「平和の礎」118基の銘が、死者の霊を弔っている。「海青き」は、作者の鎮魂の心である。

6月23日は、「沖縄忌」として永く受け継がれる。

涼しさや少女戦禍を語り継ぎ

「少女戦禍」を「語り継ぎ」が、平和への希求を繋いで行く。「涼しさ」は、語り継ぎへの励ましである。

秋暑しオスプレイ機の黒き影

猛禽のミサゴからの名が「オスプレイ」。オスプレイ機の「黒き影」が、再度の戦争への不安を思わせる。遣り切れない思いが、季語の「秋暑し」である。

科学工学を究めた作者が、鋭い目で沖縄の夏の今を詠み上げている。沖縄の厳しい現状を、我々は、日本人としてひと時も忘れてはならない、と結んでいる。

同人作品鑑賞(十二月号) 中本 清

村歌舞伎急拵への舞台鳴る 塗木翠雲

農繁を終え、収穫を神にささげるために、村人たちが演じる村歌舞伎。ここ一番の場面で、役者が見得を決めて、ぐつと客席をにらむと、床が軋む。女が泣く場面、仇討ちの剣が抜かれる時、思わぬ雑音が可笑しみを誘う。作者のほろ酔いも楽しく増したことだろう。

青べかの町はひしめき土手の秋 中嶋久登

「青べかの町」は、山本周五郎の自伝的小説「青べか物語」に登場する利根川の下流の浦柏(浦安がモデル)という漁師町。周五郎は「ひしめき」暮らす多彩な人間模様が織りなす、生きる喜びをオムニバスで描いた。

平明な季語「土手の秋」に泣くのは繁あねかブル船長か。作者は、現在の浦安と対比しながら、麗しき昭和の郷愁感に浸った。

蜻蛉の草に翹置く昼下り 疋田華子

我が国には、およそ二百余種の蜻蛉が生息するそうだ。面白いことに、赤トンボという種はいないとのこと。種類にも

掬るが、ベニトンボは、ベタリと翅を前に畳みじつと動かず、まるで次の風を待っているかのようだ。残暑の中の清涼感である。

無花果や嘘つけぬ子の泣きさうに 喜多尾明子

明らかな嘘に謝るところか、開き直りさえ見せる大人の世相。正直者たれと教え込まれた子がおかれた理不尽な状況。取合せの「無花果」をどのように鑑賞するか。

泣きそうになった子の純真な胸の内を思えば、無花果の実の粒々のように、小っちゃくていいらしい。

裏窓にタンゴのしらべ夜会草 大久保進

映画「シャルウィダンス」を彷彿とさせる。季語「夜会草」を置くことにより、端正な句となった。夜会草は夕方から夜にかけて白い花を咲かせ、翌朝にしばむ一夜花。別名「夜顔」という。

十七音の韻律を、タンゴと同じ四分の二拍子で、舌頭千転すると、心がスイングする。ステップを踏み鳴らせ。

夜濯や萎えしジーパン叩き干す 雷田勝子

作者が、長年着古した愛着のジーパン。揉み洗いの後、形を整えるのに叩く。叩いて叩いて、干す。かなりの労働だ。干した後の充実感と疲れ。頬に吹く夜風が少し強くなった。この様子だと、朝までには乾きそうだ。



柅の垣をしづれり春の雪

〔林の青空〕（1994）

江見主宰の「柅」の掲句を鑑賞するようご依頼がありました。柅が垣根となつてゐる景を見たことがなく、古く謂れのある庵、もしくは古刹の垣根かと想像してみました。

「柅」は「疼木」とも書き、「疼（ひびら）く」はひりひりと「痛む」の意味を持ち、棘のある葉は邪鬼を寄せ付けないとされています。

昭和の中頃までは、一般の家庭でも、節分には玄関の軒下の柅に鰯の頭を挿し、厄除けとした家が多く見受けられましたが、核家族化が進み、その家に引き継がれてきた風習も少なくなつてきているようです。

「柅」はモクセイ科の木であり、同じように良い香りを放つものです。仕事から帰り玄関に立つ時、柅のやさしく上品な香りに足を止め、「ああ、咲いたのか」と、白い可憐な花に冷えた体を癒されることもたびたびです。立春も過ぎ、濃緑で厚い葉の凛とした柅へ純白の春の雪がかかり、緑と白の対照の妙と、日の光に棘の先から雪が雫となつて光り落ちる情景に、間近となつた春の喜びを感じられた、そんな主宰の一句であると思います。今年も、我が家の柅が淡い香りを放つております。

（倉谷紫龍）

匂ひ立つ若木や深雪払ふ時

〔砂時計〕（85）

令和4年上梓、第二句集「砂時計」自選十句の中の一。章題「草の臘」に収められている、平成30年の作品。作者は、「風」の命題でもある「即物具象の写生」を深め、「見るごと」によつて「見えざるもの」「万物のいのち」に触れられるよう、常に心掛けて俳句と向き合つておられる。

対象と対峙した時、作者の五感生き生きと働き出し、研ぎ澄まされた感覚で詠まれた俳句は、心に響き、詩因が読み手にしつかり届いてくる。

掲句の季語は、真冬に降る深く積もつた雪「深雪」。さらにと輝く雪に埋もれた、年を経ていない若木の生命力。若木は椎の木、それとも樟だろうか。街路樹にも植栽されていて、木全体に芳しい香りがする、樟脳の原料にもなる樟の若木なのでは。

窮屈そうに埋れている若木の雪を払う時、銀世界に舞う雪と共に、何とも若々しい匂いが辺り一面に広がる。冷たく、輝き舞う真白な雪、若木の匂い、雪の匂いなど、五感に訴えかけてくる景である。その瞬間を見逃さず、何の銜いもなく、さらりと詠まれた。

冬が長い北国に暮らす人々にとつての、暗い冬のイメージを払拭し、若々しく明るく、美しい雪の一句となつた。

（林 陽子）

江見悦子句集『砂時計』を読む

船戸 一舟

個性と新しみのある俳句

作者は昭和六十年「風」に入会し平成十四年「万象」創刊同人、令和四年「万象」第四代主宰となり現在に至る。句集『砂時計』は『朴の青空』に次ぐ第二句集で、平成二十五年から令和四年までの十年間の三百句を収める。どの句も写生(即物具象の写生)が実作の指針という)が行き届き、景がしっかりと見えるのと、ありふれた表現がなく、とても興味を持って読ませていただいた。

書斎より碁石打つ音 去年今年

松の晴雪 だけの糸いく筋も

冒頭の二句である。碁石の静かな音から雪解氷のにぎやかな音への展開、去年今年の間から松の晴れの明るさへの展開に引き込まれる。

雪吊の青竹 空へ水底へ

蜥蜴出てあえかなる指 抜げたり

日当たれば 白き炎や山法師

屋根凍てて湯気横つ 飛び洗濯屋

「空へ水底へ」と大胆に詠まれた雪吊の清々しい姿、「あえかなる指」という蜥蜴の出した瞬間の観察力、日の照り翳りの中で「白き炎」と印象的な捉え方、湯気の流れる様子

を「横つ飛び」という飛躍のある表現。どれも新鮮である。

句ひ立つ若木や深雪 払ふ時

ガウディの大聖堂 出てレモン水

これらは嗅覚と味覚で捉えた句。深雪を払う一瞬に匂い立つ若木の姿、混沌とした芸術に触れた疲れを癒してくれる一杯のレモン水。そして、国内外に精力的に出かけられ、多くの旅吟が収められている。その中の海外詠

山並の裾まで 黄土耕せり

遠足の列 神殿を通り 抜け

ヨセミテの溪を ましろに花水木

どれも景がはつきりと見え、感動が伝わって来る。

梅雨 深しサウナに銀の砂時計

句集名とされた句。あとがきに「内も外もたつぷりと湿気を含んだ深々とした世界に、砂がさらさらと落ちていく時間が、何より大切なものとして思い出されます」とある。新しい素材により皮膚で捉えたさらさらと流れるような感覚がよく伝わって来る。主宰を引き継がれた時「個性と新しみのある俳句を目指す」と挨拶されたところがあるが、最後まで「新しみのある俳句」が並び、目標として学びたい句集である。

(二〇二三年 文学の森)

〒271-0871 柏市若葉一七三八B-一七〇二

子規俳句の魅力―初期の作品から(二)

沢木欣一

同じころ十一月上旬、句材を求めて三日間の武蔵野吟行を試みた。忍・熊谷・川越を回り吉見の百穴を見た。熊谷では小松屋、川越では今福屋に泊まった。実景を写し出したことの切実な試みである。三日の旅で十数句を得たが、「多少の新趣味を具へ」たと書いている。「わが俳句」

風や荒緒くひこむ菅の笠
夕日負ふ六部背高き枯野かな
雲助の鞆丸黒き楷火かな

これらの句は佳句とはいえないが、実に即し理窟を脱していることは確かである。

二十四年は月並のなから写生の新しい萌芽が生まれた重要な年であった。虚子選『子規句集』(岩波文庫)にこれらの句は載っていない。出ているのは八句のみで、その中に、

鶯や山をいづれば誕生寺

軽井沢

山々は萌黄浅黄やほと、ぎす

岩々のわれめくや山つ、じ

舟下岐蘇川(きそがわ)

下り舟岩に松ありつ、じあり

二十四年の子規は春、十日間の房総行脚をした。一句目の誕生寺は日蓮の寺である。六月には木曾を経て松山に帰り、虚子が初めて会うことになる。軽井沢での句は視覚鮮明、色彩感がみずみずしい。

三津いけす

初汐や帆柱ならぶ垣の外
落鮎や小石くに行きあたり

初汐の作、虚子によれば、松山郊外の三津浜河口の生簀の座敷から見た実景である(『子規居士の古い時代の句を説む』昭3)という。

子規の写生はこうして実景に即することから始まった。子規の句を見ると、初めのうちはそんなに器用な、上手な作家とはとても思えない。才能のひらめきは見ることができが、俳句そのものとして見ると、そう上手な人ではなかった。

ただ非常に正直なところがある。句は上手ではないが、非常に現実感が強い。まだ俳句になっていないといっているような句でも現実感が強い。(次号につづく)

『子規・写生―没後百年』(沢木欣一編 角川書店より抄出)

『小右記』拾い読み

内海良太

『小右記』は平安時代の公卿藤原実資（よふけ）の日記です。

藤原実資（957～1046）は、最終的には従一位・右大臣を務めた人です。日記は貞元2年（977）から長久元年（1040）までの約60余年近くに亘って、宮中の政務や儀式の様子、日々の出来事を漢文で綴ったもので、藤原道長の登場から亡くなるまで、道長政権の消長の時代に重なっています。

日記の内容は宮中のしきたりや摂関政治や物忌みのことなど、解り難いことばかりで、おまけに漢文で書かれていますので中々近づき難かったのですが、その全文が、容易に読める現代語で出版（平成27年10月）されたので、この時代に興味を持つ者にとっては一筋の光明でした。

『小右記』の書名には、実資の居住する小野宮から「小」、実資が右大臣でしたので「右」が付いています。

しかしこの書名は実資没後の呼び方で、実資本人は「暦記」「野府記」と呼称していたようです。

実資の祖父、藤原実頼（さねより）は藤原北家の嫡流で、摂政や関白を歴任し、小野宮流故実を創始した人です。

一門から故実に精通した人材を輩出したので有職道の名

家として宮中から重用されました。実資はこの祖父の養子となり故実全般を鍛えられました。

日記を拾い読みしてみます。

永延元年（987）正月一日、甲子

元日節会。元日に天皇が群臣に紫宸殿で宴を賜う儀式。暦の献上、吉野国栖（よしのくに）の歌舞、御酒勅使、等々を実施。

これらは、祖父の藤原実頼の先例通りに執り行ったとありますが、故実に反すると、実資はいちいち苦言を呈しています。

またこの中の「吉野の国栖奏」は現代の俳句歳時記にも載る通り、毎年吉野の国栖で旧正月の14日行われています。

長和2年（1013）五月二十五日 乙卯

実資は彰子（一条天皇の中宮、このころは皇太后）と頼繁に連絡を取っています。その取次役を担ったのが、紫式部でした（紫式部はこの7年前から彰子に出仕）。

実資は使者を紫式部へ遣わせ、東宮（敦成親王）の健康状態をたびたび伺わせています。

紫式部は使者に「東宮の御病悩は、重い訳ではないといっても、やはり未だ尋常でいらっしやらない上に、熱気が散じられません。また、左府も、いささか患う様子がありません」と伝えてきたと日記にあります。

左府とは藤原道長で、患いが多かったようです。

万象ノオト

テーマ『跳び箱』



閉脚跳び

横浜 小坂橋泰山

昭和39年、私が小学5年の頃、東京五輪の体操競技のメダルラッシュの影響だったか、鉄棒や跳び箱が、通っていた小学校の高学年の間で流行って、私も熱中したことを思い出す。

跳び箱は閉脚跳びが一般的だが、閉脚跳びという、足を開かずに閉じたまま飛び越す跳び方もあった。現在では「屈伸跳び」と言うらしい。私はこれが苦手でなかなか跳べなくて、放課後毎日練習していた。体育の授業でテストをするという話もあった、焦った。友人の「台の前方に手をつけ」との助言もあって、テスト予定の前日に、

閉脚跳びが出来るようになった。翌日のテストでも成功。うれしい体験だった。その後、さらに難しい技にも挑戦していった。今よりもずっと体重の軽かった、60年前の良い思い出である。

序破急

東京 安藤美酒々

体育館の隅にある跳び箱を運び、重ねてセツトし、その前に踏切板を置き、向こう側にマットを敷き準備完了。

うまく跳び越すポイントを開き、いざ開始。自分の番になり、「よし、行くぞ」と心構えてトントんと軽くジャンプ。トトトとと助走して踏切板を強く踏んで反動をつけ、跳び箱の前方のできるだけ遠くに手を着き、閉脚してパツと飛び越え両足を揃えて着地。「できた!」との満足感は何ともいえないものだった。

導入部の序は軽いジャンプと助走。

展開部の破は変化に富み、踏切、両手を着き閉脚の飛翔、最後は早く短くの急で躍動的にふわっと着地のポーズ。

10代の頃はお転婆で、跳び箱に音楽

や能等にも通じる序破急があるとは思えいもしなかったが、今回のお題のお蔭でじっくり考え、懐かしく思い出することができた。

遠い思い出

益子 光岡れい子

もう半世紀以上も前のこと、私が勤めていた幼稚園の運動会の種目の一つに、跳び箱の競技がありました。

助走をつけてボンと跳びきった子、ちょっと自信なげでも思い切った跳んだ子、先生に手を貸してもらってや々と跳べた子、それでも跳んだ後にはパツと両手を広げポーズを決める。園児等の誇らしげに輝いていた顔が懐かしく思い出されます。

その時の子たちも今では50代のお父さん、お母さんに。もしかしたら、お孫さん迄いるかも、と想像します。

あの顔この顔、あんなことこんなこと。思い出がどんどん膨らんで、自分もあの時に返ったように、楽しく幸せな気分を満たされました。

跳び箱のその後

札幌 石田 睦

小学校の体育の授業にあった記憶があるだけで、うまくできなくて困ったとか、得意で楽しかったとかそんな思い出はない。その昔、娯楽の少ない時代の小学校の退屈な毎日をおくす中で、体育の授業は結構楽しんでいたが、私にとっては、跳び箱が登場するような器械体操の体育の授業は、楽しい時間のはずのものが、とてもつまらないものになってしまふ象徴に近かった。ところが先日、テレビで廃校となった学校を再利用して水族館にしたニュースを見た。学校の設備をできるだけ活かした展示となり、プールがエイの水槽になっていたり、なかなか面白い。さて、跳び箱はどうなっていたかと言ふと、横を割り抜いて水槽を置き、小魚を泳がせていた。もしこんな跳び箱を跳んだら、スリル満点になっただろう。退屈な器械体操の授業もとても面白いものになっていたかもしれない。

跳び箱

東京 関 保子

小学校の校舎近くに小さな砂場があった。天気の良い日、体操の時間は跳び箱である。背の高い私はドキドキして友達の前で着地する様子を見ていた。私は駆け出して行くものの、踏み切りが弱く、跳び箱に跨ったまま止まってしまふ。きまりが悪いので、手をはたいたりして誤魔化した。

先日久しぶりに散歩の途中、母校の校庭を覗きに行った。生徒達が鉄棒に向かつて並んで立っていた。赤白の帽子を被っているので運動会の練習をしていたのか。生徒達の高い声が秋の青空に響いていた。

得意だった跳び箱

伊勢原 佐藤和子

私のふるさととは「かまくら」で知られる秋田県の横手市です。12月頃から翌年3月頃まで、空はいつも鉛色に覆われ深い雪の中の暮しとなります。

雪囲いをした家の中は、どこことなく

暗く、子供の頃は友達とお手玉をしたり、炬燵で本を読んだりの毎日でした。

吹雪の中を登校後、マントを脱いで教室の新ストーブで温まったことも懐かしい思い出です。

初めて跳び箱を跳んだのは、小学3年の頃だったろうか。最初は怖々でしたが、助走のスピード、踏切板を強く蹴る、手を遠くに着く等だんだんコツが分かって来て、高く跳べるようになりました。一段クリアすると、先生がまた一段足します。また挑戦します。男子には敵わなかったけれど、思いつき切り跳ぶことは快感でした。

「万象ノオト」投稿募集

▽6月号「蕎麦」(2月末日締切)

▽7月号「動物園」(3月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒417-0861 富士市市広見東本町14-14

神田美穂子

巻頭作家（二月号）プロフィール



一由久美子

（東京）

一由久美子さんは昭和30年長野市生まれ。高校までを長野で暮し、東邦大薬学部へ進学。卒業後は地元の病院に勤務。48歳の時に御夫君の転勤で東京へ転居して以来、65歳の定年まで調剤薬局に勤務した薬剤師である。

「ホトギス」の同人であった母上が自宅で句会を開いていたこともあり、幼い頃から俳句に興味があった。その母上との俳縁で知り合った御夫君は、俳句を始めた久美子さんを応援する良き理解者である。「不器用で、どちらかというと仕事人間だった」と自らを

評する久美子さんは、歴史好きな御夫君との寺社巡りの旅を退職後の楽しみとして、各地へ足を運んでおられる。

久々に再会した小学校の同級生7人で始めた月一回の通信句会は、これまでに10年ほど続いているが、本格的に俳句を始めたのは退職後である。テレビ番組のプレバト、新聞、雑誌、NHK俳句などは欠かさず見ており、令和4年7月、知人の紹介で「万象」東京支部の俳句スクールに参加した。翌年1月には「万象」に入会。投句を始めて間もなく、7月号、8月号に連続して4句入選を果たしている。

○ 靄や赤き大きな日が湖に
経島の社小さし海猫渡る
松脂のほふ指先春の宵
野遊びや背に水筒の水の音
○ 朧夜や鼓の胴に金の蝶
カーテンに蝶の影ゆく虚子忌かな
春愁や骨の歪みのエクササイズ

処方箋の手書きの署名あたたかし
新中央句会にも積極的に参加し、選者諸氏の覚え目出度き新人である。10月の全国俳句大会では、受付係を担当。軽快なフットワークと気配りで大会運営に大いに貢献していただいた。

10月号、11月号と4句入選の後、1月号では次の4句が巻頭を飾った。

地方紙に包まれ届く新牛蒡

○ 蘭の香や客間に父の花鉢

蔵出しの皿に温もりちちる鳴く

波音の遠くなりけり昼の虫

俳句と共にある家庭で育まれた素養に、探求心と努力が結実した、「万象」入会後わずか一年目の快挙である。

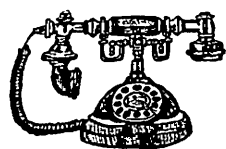
句作は苦しく頭が真っ白になるが、句会の時間はとても楽しいと仰る。

俳句の世界に導いてくださった母上と御夫君に感謝しつつ、俳句のある暮らしを存分に楽しんで頂きたい。

久美子さんの益々のご活躍を期待しています。おめでとうございます。

（久留島規子）

万象作品



江見悦子・内海良太共選

○は佳句に選ばれました。

ずると砂利の上ゆく穴まどひ 福岡 宮田千恵子

AランチBランチにも栗の飯

○踏みしむる足裏ほのと今年藁

秋水に雲のかけらのうつろへり

読み止しの本はそのまま十三夜 横浜 星野信子

○白杖の打つ石だたみ秋の寺

新刊のインクの匂ひ寒露の夜

手捻りの湯呑みの馴染む夜長かな

大根蒔く嫗遠州訛かな 静岡 伊東文恵

狢犬の爪の尖りも秋の色

開け放つ農小屋の窓小鳥来る

○鵲鳴くや牛糞無人販売所 静岡 松田好子

落ちさうで落ちず列なる草の露 金沢 松田好子

○船小屋に天蚕糸のアート能登の秋

微動だにせぬ蠟燭の太き腹

耳底に二胡の音のこる星月夜

○銭湯の葉草袋冬来る 静岡 杉田義則

冬ざれや朽ちたる家の樋の水

故郷の土の味する零余子飯

秋の昼土蔵喫茶の虫籠窓

名月の浮びてをりぬ心字池 静岡 内藤允昭

東の空ほんのりと無月かな 札幌

鉢の中摺られて跳ぬるところ汁

○納骨や墓石掠むる鬼やんま

天高し撒き餌に集ふ雀どち 船橋 槐島 修

路地裏や馥郁として金木犀

銀杏散るゆるりゆるりと車椅子

○霜柱踏んで通学昭和の日

つま先で落葉の山を蹴つてみる 東京 齊藤孝夫

○スニーカーは銀杏落葉の碎氷船

人道物資何処から何処へ星流る

風に隠れただひとひらの六花

陽に透ける翅の煌めく秋茜 札幌 石田 睦

照紅葉はしやぐ園児の声響く

秋夕焼浜辺一面茜色

雪支度の後のラーメン妻恋し 札幌 佐々木 茂

温室の金木犀愛で蝦夷暮し

○鮭のかまほぐせる灯下三平汁

昨日より僅かに尖る秋の風 島崎 洋

○大根抜く地球と綱引きする構へ

足踏みのオルガン昭和の文化祭

秋耕の土に膝つき百合根植う 札幌 園田鶴子

払ひつつ歩く日向や雪螢

霧分けて青き摩周湖現るる

どの花もわづかに残り秋深む 竹重富子

大根の二十ばかりを吊しけり

木枯やバックミラーに栗鼠よぎる

豊穰の秋風孕み獅子踊 田邊政代

○秋夕焼に追はれ庭師の背の屋号

風と舞ひ波のやうにもいてふ散る

病牀六尺子規の糸瓜の花残る 谷 廣司

市ヶ谷の櫟並木や天高き

立冬や少し尖れる波頭

鶏頭花子規愛したる狭き庭 土門 一平

道すがら綿虫まみれ職場まで

秋晴や道路工事を急ぐ人

秋晴の子規庵の庭小宇宙 土門 一

曇り空鼻に綿虫ひんやりと

隣家へと伸びる枝切り冬構

七五三すました顔は祖母似かな 船橋明美

柿干して母の手作りなつかしむ
長き夜や昔ばなしを聞かせたる
居間奥へ伸ぶる日影や冬隣

札幌

和島良一

駅出づる人ほろほと夕月夜

○浜小屋に石乗するころ雁の声

新庄

曾野部礼子

しやきしやきと色鮮やかな菊膾

聳え立つ出羽富士紅葉に染りけり
炊きあがる栗ごろごろと栗ごはん

大江

安藤桂花

○パンプスで登る月山薄紅葉

峡の夜や虫の鳴く声風の音

仙台

富田洋子

○白粥に宮の藻塩や文化の日

赤き柄のかな筆馴染む小六月

縄電車小春の宮に到着す

新潟

榊原キヨ子

ふかふかの椅子に足浮く小六月

神の旅山の彼方へ雲走る

黒堀に顔出すかりん艶の良し

栗おこはに笑顔の続く和菓子店

ハロウィンの飾りを盛れる和装店

佐藤幸示

榎殻の土のう五円で土手治め
落葉舟溪の澱みに停泊す

新潟

山田季聰

虫時雨廃遊園地寂深め

きはやかな山の稜線種を採る

燕

渡辺志ま

○佐渡めざす船白白と小春風

枯芦や潟より望む弥彦山

いもがらを剥く指先の色づきぬ

芳賀

稲川清子

裏山の小豆引きたるほまち畑

亡き母の植ゑし水引咲きにけり

山の日をたつぷり纏ふ烏瓜

福武幸子

仏彫る木屑の匂ふ秋日和

秋うらら経に耳たて盲導犬

色鳥や朝日の庭に飛び交へる

鹿沼

渡辺利子

栗を剥く縁側妣を思ひつつ

飛行機の横切る月や十三夜

シヨパン聴く栗黒ぐろと渋皮煮

栃木

飯塚キミ

薄墨の雲の流るる十三夜

遠筑波山波に漂ふ浮寝鳥

○秋日和蔵にワインの樽並ぶ

佐野

木村君子

花芙蓉改札口に子を待てり

八咫鳥の絵手紙受くる秋の暮

下校子の賑やかに来る刈田道

佐野

齋藤ミチ子

前庭の黄菊を風の揺しけり

菊摘んで籠に満せる香りかな

戸隠の古道の落葉さくさくと

忍野八海富士も紅葉もくつきりと

初生りの小粒の柿を手のひらに

秋の浜ネイル華ぐフラガール

城址の鋳物の橋や照紅葉

仲山さよ子

菰原美穂子

義本美智江

義本美智江

義本美智江

義本美智江

義本美智江

義本美智江

義本美智江

義本美智江

義本美智江

稲の秀を手向くる父母の遺影かな

小春日の千円床屋外に待つ

タブレットの手書きの署名文化の日

縁側にくつろぐ猫や吊し柿

取り合ひし貧しき頃の白菜漬

ライバルの計に落胆や神の留守

時は過ぎ脚なほ癒えず文化の日

配色は神の手になる木の葉かな

大根干す遠き島影二つ三つ

金継ぎの傷のいはれや冬日和

○冬銀河棲み分けできぬ獣ゐて

朝の雨掘り残したる甘藷畑

○荒草の中に整ふ彼岸花

栗拾ひ好きなる母の栗ご飯

○人影に色の見え来てまた霧へ

絶えぬ戦石榴は落ちて粒赤き

焼き秋刀魚の匂ひ堪能久し振り

街道に残る牛舎や小鳥来る

木木たちに菰を被せる冬櫓

○柴又のとら屋賑はふ七五三

志木

志木

志木

志木

志木

志木

志木

志木

志木

志木

志木

志木

志木

志木

志木

志木

志木

志木

志木

志木

森山洋之助

森山洋之助

森山洋之助

森山洋之助

森山洋之助

森山洋之助

森山洋之助

森山洋之助

森山洋之助

森山洋之助

森山洋之助

森山洋之助

森山洋之助

森山洋之助

森山洋之助

森山洋之助

森山洋之助

森山洋之助

森山洋之助

森山洋之助

秋草を踏み一周す姥ヶ池

佐倉

杉田富美代

葉に止り花と見紛ふ秋の蝶

船橋

山口秀吉

新涼や手の甲に見る皺の数

鈴木隆久

通し土間風も蜻蛉もすいと抜け

縦走の最後の宿の茸汁

柏

鹿毛満子

赤とんぼ呼べどすぐ逃げ一茶句碑

虫すだく闇の舞台をほしいます

鈴木美根子

本国の子の電話なり冬立つ日

ドロップ缶振ればカラカラ小鳥来る

筑波山出で富士山へと続く罫雲

村田由美子

ニユース読む声A Iや文化の日

秋晴やジャングルジムの天辺へ

立原千代子

築地塀のつづく坂道秋うらら

ばらばらと零余子こぼるる垣根かな

椎の実の降るや走り根著き道

松戸

石川幸子

蔓引けば大木ゆらす藪枯らし

一叢のどつと手招く尾花かな

松戸

石川幸子

行く秋のいつまで続く介護かな

米田敏子

雲一つなき立冬の空淡し

風吹けば花の絨緞金木犀

米田敏子

夕暮るる園やわらわら冬鴉

菊岡緋路

湯気あげて第一杯の衣被

有りの実を汁滴せ剥きにけり

星月夜木更津甚句聞く夜かな

入河 大

十月桜久闊を叙す五人かな

引越しにちゃんちきおけさ秋の暮

船橋

入河 大

稽田や沼風の道ゆつたりと

寿多映子

秋空や勝手気ままな風見鶏

近藤澄子

小鳥来る水戸家鷹場の史跡かな

贈呈のボールペン手に秋の声

近藤澄子

ツイードの背広仮縫ひ冬隣

枝より枝へ一丈光る蜘蛛の糸

近藤澄子

落葉碎く車輪に急ぐ映写会

中森ひろえ

母の日の男の子の並ぶ花屋かな

中森ひろえ

○炊ぎつつ唄ふ「昴」や秋の暮

中森ひろえ

風に聴く津軽三味線りんご狩
霧の道テールランプに縋りつつ

○処理水の放たれし海秋刀魚去ぬ

松戸

野田成夫

一つ減り二つ減りして吊し柿

生垣に白山茶花や帝釈天

虫の音と共にくつろぐ仕舞風呂

川の辺の燕の去りし空暮るる

六地藏色なき風に供花揺るる

○小春日や眼鏡のねちを締め直す

東京

安藤美酒々

小六月修理道具は父譲り

地下鉄に縁起熊手を高高と

本堂をカメラに納め秋彼岸

秋深し森くぐる度さびしくて

夕されば厨に香る茸飯

○色鳥や子らに大きな絵本読む

秋霖や横顔ならぶバスの窓

雨粒に包まれてゐる銀木犀

鎮魂のエイサー太鼓秋彼岸

○天高し真砂女通ひし魚市場

うす紅の萩に小雨の降りつく

大場八朗

一由久美子

石山風童

○久方ぶり車窓に能登の初時雨

東京

北口富栄

干大根日にしなやかに日に白し

雨乞ひの碑のはるかなり草の絮

会釈して名前うかばず鰯雲

○縫針の穴小さきや蚯蚓鳴く

挨拶は笑顔の白寿さやけしや

秋ともし曲りぐせ有るペン習字

山粧ふ全校生の写生会

信濃路の旅より届く走り蕎麦

○猿翁の「黒塚」を観る文化の日

夫八十かさ少な目に栗御飯

一人居の秋夜緋く乱歩の書

内濠の大白鳥の波紋かな

饅頭を蒸す参道の秋日かな

○キャンパスのよさこい踊り秋うらら

落柚子を賜ふ関口芭蕉庵

枝踏へ柿食ひ散す鴉かな

有りの実の皮むく重さ転しつ

不作てふ越の国より今年米

秋場所を終へし髭面力士かな

長谷川信也

中澤桃子

鶴田智美

田崎京子

高野翠子

長谷川はるみ

秋曉や雷の乱るる稽古後

フランス映画はねし銀座の居待月

東京

平子甲奈

昨日今日月を待ちたる夜勤かな

秋風の墓にいもうと訪ね来し

公園の落葉掃除の一休み

前川 昇

雨少しどんぐり拾ふ散歩道

遠出して落葉に滑る山の道

鯊釣や護岸に並ぶ親子連れ

松井宣夫

菊なます男二人の夕餉かな

○秋麗思はぬ出物古本市

登園の楽しみ柘榴割るる頃

松本幸男

気を静め釣糸垂るる秋の海

推敲は楽しく苦し鯛雲

故郷へ一輛電車秋高し

宮崎正義

小春日やワインの空き瓶林立し

忽然と出でよ徒雲秋の空

パッチワークめきたる稲田黄金色

三鷹

南場雅子

秋風や庚申塚の赤き屋根

清秋の富士の高嶺の白さかな

釣船草夕日に爆ぜて鎮りぬ

府中

竹村晃子

団栗を競ひて拾ふ園児かな

芳しき柗の花散りはじむ

歩行器の音に従ひ落葉踏む

国分寺

中ノあさ子

コスモスの散つて静かな植物園

山門に続く畔道曼珠沙華

ガラス窓忙しく歩く秋の蠅

青梅

横井一美

去年より増ゆる彼岸の赤き花

恐竜の遊具に桜紅葉散る

白日や縞目くつきり秋の蝶

横浜

大駒泰子

小鳥来る第一声のはればれと

秋暑し撒き餌横取る鴉ゐて

独り住む朝の梢に小鳥来る

岡 元枝

水引の花絡まりぬ風少し

雲一つ十一月の空の青

旅客機を茜に染めて秋没日

加藤和子

庭手入れ港の秋灯数を増し

虫干の晴着息する気配かな

○御文庫の秋日に白し冷泉家

坂本具子

閑かさや荒れし茶庭に榎植熟れ

壱岐島の砲台跡や蔦紅葉

○新しき眼鏡や灯火親める 横浜 鈴木律子

青空へ光を放つ照紅葉

本堂の廊さはやかに拭き込みぬ

西窓に取り残されし秋簾

長野高朋

編笠に透けるうなじや風の盆

来し方に悔悟の念や法師蟬

転るを自ら止る木の実かな

川崎

横山ユキ子

押入れの雑事さておき日向ほこ

足腰のしたたかであれ返り花

青空に秋明菊の真白かな

茅ヶ崎

久保田富士子

キャンパスに源流の森鴟猛る

よちよちの公園デビュー小鳥来る

掃き寄する肩を叩けり銀杏の実

伊勢原

山本カツ子

爽やかに擦れ違ふ子の髪に風

彩りを風にあづけて初紅葉

柿たわわこの一枝の折れさうな

松田

古谷悠紀子

木犀の香をひきつれて山の風

スプーンで掬ふ熟柿や凍らせて

棟上げてほつと汗拭く瓦葺き

松本

藤森利子

孫と子と笑顔で写る夏休み

残雪に囲炉裏の灰をまきにけり

野の錦硝子に映る峡の村

静岡

飯田優子

魚屋より水のこぼるる朝寒し

秋深みしやがみ煙草の農夫かな

三体の案山子の守る棚田かな

キャンパスに芒野の景収まらず

もみづるや昨日と変る散歩道

大小の石まじる畑蕎麦の花

茶の花や杖を休むる一里塚

○椎拾ふ小夜の中山無住寺に

霧霽るる峡の山山夕近し

田中秀幸

樞の実の観音像の膝を打つ

禅寺の句碑の裾なる彼岸花

浄連の滝の水引き花山葵

筑地裕子

川沿ひの白山吹の実の黒し

湯の宿の庭木犀に月明り

峡の村脱穀の音嚟して

永田公香

薬師堂薄の波を眼下とし

秋潮へ白波残し出航す

滝音を閉ぢ込め清き大水柱

長谷川秀子

マフラーに照れる思ひを隠しけり
月明に浜の焚火のうすれゆく
ボサ・ノバの流るる通り秋の色

静岡

松永博子

○秋ともし鎧の漆黒光る

薬師堂の闇覗きたる文化の日

矢野喜久江

十三夜下駄履きのまま庭に出で

天高し父に呼ばれて子の走る

焼津

小梁洋子

病室に海見やる母小春風

○菊日和見つけし眼鏡又なくし

腹で聴くロックのビート秋闌くる

掛川

鈴木美由紀

花嫁の肩に浴びたる今年米

稽の穂伸びて雀の一羽二羽

十三夜庭の草木の影深し

川島

鈴木裕一

秋祭囃大鼓の遠くより

バスを降りつるべ落しの寸又峽

金沢

北野陽子

窓越しに獣の気配夜寒かな

秋祭廻るみこしの晴れ姿

金沢

北野陽子

散歩道踏みどころ無く木の実降る

金沢

北野陽子

祭太鼓園児のばちの天を衝く

金沢

新出祐子

フルートに歌声のりて秋の色

実むらさき付かず離れずしじみ蝶

嵩高き落葉踏み行く獣道

田上ナツ子

○舟絵馬の掛けある蔵や石落の花

一声に枝を撓らせ石榴挽ぐ

サルビアの花に声かけ登校す

廣田宏美

新涼や仏具みがきのはかどれる

○糠雨に山萩枝垂れ秋声碑

細道をゐのこづち付け回覧板

宮崎恵美

菩提寺に赤とんぼ又赤とんぼ

父子像に佇む人ら霧の中

白山

朝倉みゆき

芸術祭三代揃ひボレロ舞ふ

食卓へ香りに釣られ諸ごはん

新胡麻を掛けて達者に老夫婦

喉走るそば湯も旨し走り蕎麦

鶴尾正江

長き尾を振りて軽やか石たたき

小春日や少年釣具準備して

赤のまま道の岐れに道祖神

敦賀

川口和代

野鳥鳴く山ふところに薄紅葉

栗ご飯病癒ゆとて届きけり

化粧塩濃き落鮎や峡の茶屋

敦賀

為永香月枝

○原子炉の廃炉作業や螻蛄の鳴く

数珠玉や祖母のお手玉余り裂

秋ぞらを大きくめぐる観覧車

山本一枝

歟の柄をもて大根の畝はかる

柚子ひとつ添へて小包送りけり

秋風にクレープほほばるゑくばかな

徳島

池田やすし

朽ち果てし蟲の骸や月上る

虫の音や神の楽譜を演奏し

林 早苗

鉢植ゑの土入れ替ふる寒露かな

霜降や息吹きかけて窓を拭く

山本瑤子

まだ青きどんぐり拾ふ美術館

あかり消す月の光を浴びたくて

○蒼天へ連なる赤き蕎麦の花

福岡

相本和子

朝寒やスリッパ捜すベッド下

自転車の荷台に小犬秋うらら

魔法瓶ちひさきを買ひ冬支度

御殿場の秋夕焼に足湯かな

園田清子

高高と出水野に鶴鳴きにけり

天高し富士を見上ぐる旅の宿

唐梨の青きに触るる日照雨かな

福岡

鶴田輝代

極めたり青き地球の秋の空

手作りの豚の角煮や新酒酌み

灯台のらせん階段いわし雲

那珂川

高山ひさ子

秋高し海を背に鳥居百

小鳥来る池の真中に夜泣石

○立冬や争ひ続く友の国

ベルン

森尾 舞

どこからかシヨパンのソナタ初時雨

北海の雁の啼く空雨つづく

お詫びと訂正

1月号の「巻頭作家(十二月号)プロフィール」の谷廣司さまのお名前の読み仮名が間違っており、大変に失礼致しました。お詫びして訂正致します。

誤 こうじ

正 ひろし

〈新会員のご紹介〉

長谷川洋子様 (静岡市)

「2月は「万象俳句会会費」の「納入月」です」

「理解」と「協力」を宜しくお願い申し上げます。

① 万象俳句会の会計年度は、4月1日～翌年3月31日です。
② 振込用紙は、毎年万象誌2月号に挿入しています。

振込用紙を紛失された場合は、郵便局備付けの振込用紙をご利用下さい。

③ 振込みは郵便局窓口、又はATMからお願い致します。
④ 振込み締切日は2月末日です。2月末日までに振込みをお願い致します。

⑤ 振込先は、郵貯振替口座番号【00230-0-10361】

口座名【万象俳句会】です。

⑥ 会費は、前納制で1年分をまとめて振込み願います。

⑦ 金額は、

一般会員 12,000円です。

同人会員 24,000円と同人会会費5,000円の

合計29,000円です。

⑧ 振込み頂いた会費は、原則として返金致しません。

⑨ 振込み用紙の半券（控）を「領収書」と致しますので、大切に保管願います。

⑩ 振込手数料は「ご本人」負担をお願いしております。

⑪ 同人会会費（5,000円）は、後日、同人会会計口座へ纏めて振替えます。

万象俳句会 会計担当 松浦 陵保

万象同人会 会計担当 大久保 進

「万象」誌の配送について

万象俳句会

これまで、毎月の「万象」誌の発送は、印刷を依頼しているダイワクリエイト社に委託し、「クロネコDM便」で月末にお届けしてまいりました。

このたび、ヤマトグループが日本郵政グループと「持続可能な物流サービスを推進していくための基本合意を締結した」とのこと、この合意に基づき、新たな投函サービス「クロネコゆうメール」が発売されることになりました。

これに伴い、ダイワクリエイト社でも、2月以降は日本郵便の配送網で配達される「クロネコゆうメール」を使用し、「万象」誌を皆さまのお手許にお届けするようになるとの連絡を受けました。

これまでと異なり、ヤマト運輸が受け取った「万象」誌は日本郵便に持ち込まれてからの配送となるため、数日の遅配が生じる可能性もあるとのこと、配送が平日のみとなったり、荷物の問い合わせが不可能になったりと、利用者にとっては喜ばしいことではないようです。しかしながら、本件はヤマトグループと日本郵政グループの二社間での取り決めに基づくもので、他の選択肢がありませんので、新しい形態に従うほかないようです。何かとご不便をおかけすることがあるかもしれませんが、やむを得ぬ措置としてご理解いただきますようお願いいたします。

万象作品の佳句

内海良太

踏みしむる足裏はのと今年藁 福岡 宮田千恵子

コンパインの普及で藁の収量が少なくなった。今では稲架で乾かし、脱穀された新藁は貴重なものとなっている。

宮田さんは新藁のいい匂いを嗅ぎながら足裏で感触を楽しんでいるのだろう。乾燥した藁は足裏に温かく何とも懐かしい。いつまでも踏みしめていたいほどである。

白杖の打つ石だたみ秋の寺 横浜 星野信子
目の不自由な方が、お寺に参詣に訪れたのだろう。

石畳はどここの寺でもゴツゴツして歩き難い。周囲で心配そうに見守っているのが分かる。モノを介しているので景が眼に浮かぶ。即物具象の写生を心懸けている作者の姿勢がいい。

鵲鳴くや牛糞無人販売所 静岡 伊東文恵

鵲の鳴く季節になってきた。この時期は農作業もあらかた終わり、しばらくすると来春の準備が始まる。

農家の人達が気軽に利用する無人販売所だろう。牛糞の袋の山積みには豊かな農村地帯を想像する。

事実をそのまま投げ出したような句、まだ詠まれていないものを発信するのも俳句だ。

船小屋に天蚕糸のアート能登の秋 金沢 松田好子
能登は漁業の盛んな地、三方を海に囲まれた能登半島は大

小の漁港を多く擁し、船小屋も多い。

句の天蚕糸は釣り糸と理解しているが、最近ではこの材質が室内装飾品に使われているようだ。船小屋の主人も若返って、出漁のない日は天蚕糸アートを楽しんでいる。作者はしっかり現代を見詰めている。

銭湯の薬草袋冬来る 静岡 杉田義則

都内の銭湯は人手不足や燃料費の高騰、利用客の減少などで経営は大変と聞く。経営も季節毎に菖蒲湯や柚子湯などとして趣向を凝らし気を遣う。冬が来れば薬草の湯がいい。湯気もうもうの中で漢方の匂い、身体が温まり薬草の効果を実感する。町なかの生活感がよく出ている。

納骨や墓石掠むる鬼やんま 静岡 内藤允昭

よく分かる句である。納骨のさなかに鬼やんまがスーッと飛んでくれば、それに応じた解釈で直ちに句となる。蜻蛉や蝶々、蛾でもいい、飛んでくればその場の雰囲気や和らげホツとする。無駄な悲しみはここには無い。

霜柱踏んで通学昭和の日 船橋 槐島 修

昭和世代の槐島さん、小学校の通学路は泥の道だった。寒い朝の通学は朝日に霜柱が輝いていて、それを踏みながらの通学も楽しかった。おしなべて都市化されている現代、完全舗装と温暖化で霜柱も遠くなりつつある。

スニーカーは銀杏落葉の碎氷船 東京 齊藤孝夫

東京神宮外苑の銀杏並木の黄葉は、色も落葉の嵩も目を見張るものがあり、これを目当てに出掛ける人も多い。

この頃は老いも若きもスニーカー、色もスタイルも恰好が

いい。句は銀杏落葉を踏み砕くスニーカーが碎氷船となっているという飛躍した暗喩が句を引き締めている。

これより三句入選からの佳句

浜小屋に石乗するころ雁の声 札幌 和島良一

以前は、晩秋の関東地方でも北方から渡ってくる雁をよく見掛けることがあった。雁の列から賑やかな鳴き声が聞こえたこともあったが、今はまれである。

句からは、初冬の石狩から留萌にかけての閑散とした海辺を想像する。雁の頃、シベリヤの強風に対峙するために屋根に石を乗せる風景はいかにも北海道の景色である。

バンブスで登る月山 薄紅葉 大江 安藤桂花

月山は山形県のほぼ中央に位置する1984mの独立峰。「おくのほそ道」の芭蕉・曾良も登った山。八合目まではバスで行けるが、頂上の月山神社までは、登山靴でないと難しい。安藤さんは八合目の弥陀ヶ原で薄紅葉を楽しんで来られたのだろう。山登りを楽しむ現代風俗とみた。

荒草の中に整ふ彼岸花 酒々井 小林あけみ

雑然とした荒れ地の中から、毎年彼岸の頃になると決まって彼岸花が芽を出す。楽しみながら毎日の成長を観察していると、自然の偉大な摂理をつくづく感じる。開き終え、形が出来た彼岸花の姿に「整う」の言葉が適切。

人影に色の見え来てまた霧へ 佐倉 新谷八郎

霧の奥に赤い色の服を着た人影が見えた。色は霧で滲んでいて再び霧の中に消えた。霧の中の一瞬の出来ごとを捉えた

写生句だが、謎めいた人影が心に残る余韻のある句だ。

猿翁の「黒塚」を観る文化の日 東京 鶴田智美

「猿翁」は令和5年9月に亡くなられた三代目市川猿之助。猿翁の演じた「黒塚」がTVで追悼放映されたのだろう。「黒塚」伝説は安達が原の鬼の住処の話。「おくのほそ道」の旅で芭蕉もこの地を訪れている。「万葉集」や謡曲にもある古い説話で、文化の日に猿翁の得意の演目の放映は追悼に相応しい。

秋麗思はぬ出物古本市 東京 松井宣夫

秋恒例の神田の古本市。思はぬ出物の発見が古本市の醍醐味。松井さんは無事購入して帰られたのだろうか。

私も同じ古本市で思わぬ出物に出会ったが、帰りに買う積りでいたが、帰りにはもう売れてしまっていた。出物はすぐその場で購入するのがセオリ、それを忘れていた。

御文庫の秋日に白し冷泉家 横浜 坂本具子

令和5年の秋、京都非公開文化財の特別公開があり、「和歌の家」と言われる冷泉家住宅も一般公開された。

行かれた方も多いと思うが、場所は京都御所の北側にあり、今に残る唯一の公家の住宅。屋敷の内外には白の漆喰が多く使用され、句にあるように国宝や重文の典籍や古文書を收藏する御文庫も白造りである。

藤原俊成・定家の自筆本が収められた御文庫の前で坂本さんの感慨深げな様子が想像できる。

新中央句会報 (11月例会)

令和5年11月26日(日) 東京文化会館

(出席28名)

江見 悦子 主宰選

顎長き禰宜の欠伸や神の留守
 俊足の松葉杖つく冬はじめ
 銀杏散る「かしわまち」から「まばしむら」
 小春日のなかなか詰まぬ詰将棋
 風騒ぐ令和五年の憂国忌
 肩の子の夜空にかざす熊手かな
 重ね着の肩の触れ合ふ陶器市
 老多き村したがへて山眠る
 生葉に鬚根の多し小六月
 落蟬の木乃伊と化して冬に入る
 初霜の白のまぶしき濁世かな
 柿落葉杷の爪に刺さりをり
 ④冬桜花芯に雨のひとしづく

中村千久
 藤原善明
 村田由美子
 中村千久
 加賀葉子
 下嶽孝一
 柳澤宗正
 下嶽孝一
 榎本文代
 小池清晴
 中村千久
 奥 太雅
 沢辺たけし

④冬桜花芯に雨のひとしづく 沢辺たけし

冬桜は、小ぶりで白色の一重咲きの花を11月頃から1月頃にかけて開く。暖地に咲く淡紅色の寒桜(緋寒桜)とは別種であることに気を付けたい。冬桜の花の中心に一滴の雨雫を

見留めた作者。時雨のあとだろうか、辺りの空気もしつとりとしている。はかなく美しい冬桜の、命に触れた句。

俊足の松葉杖つく冬はじめ 藤原善明

普段は俊足で知られる人物が、ふとした怪我で松葉杖を突くことになってしまった。しばらくは走ることが出来ず、仲間が走るのを見ているだけの姿に、同情もし、何となく笑えてしまうような気持ちも湧いてくる作者。ランナー仲間の一人としての親愛の情が見て取れ、諧謔の句となった。

柿落葉杷の爪に刺さりをり 奥 太雅

「杷」とは、長い柄の先に粗い歯をつけた熊手のような農具。土を掻き均したり、木の葉やゴミなどをさらうのに使う。掲句は農家の庭先の景だろうか。他の落葉はさらえたが大ぶりな柿落葉は歯に突き刺さったままだ。色彩も鮮やか。

内海 良太 名誉主宰選

顎長き禰宜の欠伸や神の留守
 ゆるやかな雲見て勤労感謝の日
 小さき畝笹竹さして冬構
 能登しぐれ土つやつやと純子句碑
 熊手売る法被のがらは熊手の絵
 風騒ぐ令和五年の憂国忌
 鞘堂の屋根しぐるるや平泉
 畳屋に「休憩」の札菊日和
 冬晴やレール継ぎ目の音響く

中村千久
 榎本文代
 沢辺たけし
 江見悦子
 下嶽孝一
 加賀葉子
 沢辺たけし
 村田由美子
 安藤美酒々

小六月行司の声の裏返る 塗木翠雲

初霜の白のまぶしき濁世かな 中村千久
うらやまを柿の染めぬる村静か 赤堀洋子

長き夜は古い映画とサリンジャー 松井宣夫
④ 曳船の浅き喫水神渡し 大久保進

⑤ 曳船の浅き喫水神渡し 大久保進

隅田川を眺めていると、タグに曳かれ喫水線ギリギリの船をよく見掛ける。初冬の頃の西風の強い日は隅田川も波立つ。船が波を被らないかなあと余計な心配をする。掲句は季語の幹旋がいい。「神渡し」の本意は諸国の神々を出雲に送る西風とか鳥羽地方の船乗りの航海用語をいうが、春のうららの隅田川と反対の初冬の隅田川の感じがリアルに出ている。

初霜の白のまぶしき濁世かな 中村千久

「濁世」は仏語の「濁り汚れた人間の世」とある。現代の世界は国の内外ともに「濁世」とか「乱世」の感じがしてやり切れない。せめて初霜の白をもって「濁世」を清めてもらいたいものだ。

ゆるやかな雲見て勤労感謝の日 榎本文代

多様な現代社会は心身ともにストレスが多い。この日は皆の人に勤労の感謝をしつつも、一番は自らの毎日に感謝しなければならぬだろう。ゆるやかな雲を見ていると心身ともに解放されるのである。

中村千久選

庭園に影絵のごとく松手入れ 南雲秀子
九十九里渡るかりがね浜日和 三屋英俊

梅干の壺の口切る今朝の冬 内田郁代
茅葺きの囲炉裏のけむり暮の秋 三木豊子

鞘堂の屋根しぐるるや平泉 沢辺たけし
陶工の里や初冬の煙立つ 内海保子

長き夜は古い映画とサリンジャー 松井宣夫
炉開の水屋に届くいなり寿司 久留島規子

物入りに小銭数へて一葉忌 大久保進
筑波嶺の鳥居の見ゆる十一月 内海保子

老多き村したがへて山眠る 下嶽孝一
重ね着の肩の触れ合ふ陶器市 柳澤宗正

⑥ 調教の馬の睫毛に霧のつぶ 内海良太

⑦ 調教の馬の睫毛に霧のつぶ 内海良太

朝早くに行なわれる競走馬の調教である。二、三頭の馬が競いながら朝霧の中を疾駆する。調教を終えた馬は全身に湯気を立てて馬房に戻って来る。その長い「睫毛」に「霧のつぶ」が光っているのを見留め、鮮やかに仕立てた一句。「霧のつぶ」、いいなあ。

長き夜は古い映画とサリンジャー 松井宣夫

ネンテン先生が、麥丘人の句集にカタカナ語が多いと書いていた。それは言葉を楽しむセンスであると。掲句の「サリ

ンジャー」もそれで、懐かしさがこみ上げてくる。秋の夜長に観た映画、こちらは何だったのだろう。気になる一句である。

重ね着の肩の触れ合ふ陶器市 柳澤宗正

文句の付けようのない写生の句。狭い通路を挟んで「陶器市」が開かれて露店が並んでいるのである。「肩の触れ合ふ」と捉えたから、情景が一気に浮かんできくのだ。季語の「重ね着」で、市を行き交う人の様子が、ここでも見事に描かれている。

榎本 文代 選

行人の歩みの早さ初北風	松井宣夫
銀杏散る「かしわまち」から「まばしむら」	村田由美子
小春日のなかなか詰まぬ詰将棋	中村千久
窓明けて明けの明星厚着して	桔梗 純
乗り換えの巣鴨のホーム大熊手	島野ひさ
小さき畝笹竹さして冬構	沢辺たけし
長き夜は古い映画とサリンジャー	松井宣夫
炉開の水屋に届くいなり寿司	久留島規子
調教の馬の睫毛に霧のつづ	内海良太
金目鯛こつくりと煮て母のこと	内田郁代
矢切より渡舟で帰り葱の束	内海良太
◎このあたり確か菊坂一葉忌	島野ひさ

◎このあたり確か菊坂一葉忌 島野ひさ

本郷の「菊坂」に樋口一葉が母と妹と暮らした場所がある。「このあたり」と一葉を偲ぶ作者の感慨が、「確か」から伝わってくる。忌日は11月23日。今年は菊の香がしみ通るような澄んだ一日だった。

矢切より渡舟で帰り葱の束 内海良太

葛飾柴又に「矢切の渡し」がある。渡し舟は江戸川を渡って対岸の矢切から帰って来た。矢切は葱の生産が盛んなところ。「葱の束」が素朴でいい。そして中七の「帰り」が巧みで、一句にストーリーが立ち上がってくるように働いている。

長き夜は古い映画とサリンジャー 松井宣夫

秋はしみじみと夜の長さが感じられる。灯りは読書に団欒にと、こころ澄むもの。懐かしい映画もいいが、掲句はなんといつても「サリンジャー」で決まった。「ライ麦畑でつかまえて」で脚光を浴びたアメリカの小説家である。

今後の新中央句会の予定

▽2月25日(日)	東京文化会館	中会議室	13時より
▽3月24日(日)	東京文化会館	大会議室	13時より

1月25日発売

俳句

2月号

予価1,300円(本体1,182円)①

特別作品 高橋睦郎
行方克巳・津川絵理子
作品 水内慶太・坂本宮尾
依光陽子

大特集

省略

ものごとの核心を掴む
▼総論 省略とは何か―省略と余韻の違い……江崎紀和子
▼解説 何を省略するか 主語/動詞/時間/場所/意味ほか
▼各論 どう省略するか 作句の現場から
▼鑑賞 省略の効いた名句50選

特集

日本橋と俳句

▼総論 日本橋と俳句・俳諧について
▼論考 日本橋と俳句の歴史/江戸の俳諧師と日本橋
近代の俳人と日本橋
▼略年譜 日本橋句会の歴史と現在

特別企画 全国結社マップ vol.5 近畿

季寄せを兼ねた 俳句手帖 春

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売! 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

座談会

最近の名句集を探る

五十嵐秀彦『暗渠の雪』 赤野四羽
杉山久子『葉』 大西 朋
小田島渚『羽化の街』 名取里美

司会・筑紫磐井

▼BOOK☆WALKER 日野草城

桑田和子

▼今月の華

中川雅雪

中戸川由実

▼巻頭三句

山尾玉藻

古田紀一

高橋将夫

河村正浩

上田日差し

中山和子

▼俳句と短歌の10作鑑録

野名紅里

郡司和斗

▼全国俳誌協会吟行記

秋尾 敏

▼好評連載

成瀬政博

とりあえずの日々

筑紫磐井

俳道観測

坂口昌弘

忘れぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手配り、俳人の響き

大西 朋

俳句へのまなざし

井上泰至

俳句の詩語イメージ辞典

神作研一

てのひらの江戸

古典箱を旅する

藤村公洋

俳句のつまみ

秘矢まりえ

諸家書案

二ノ宮二雄

俳句四季
Haiku Shiki

2024年2月号

1月20日発売 定価1100円(税込)
<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

北から南から

敦賀支部のあゆみ

敦賀 倉谷紫龍

令和4年度より新体制で始まった「万象」敦賀支部は、手さぐりの一年でした。令和5年に入り、コロナも下火の兆しとなった5月1日、三方郡美浜町の彌美神社（県無形文化財）に「敦賀句会」「まつかぜ句会」の合同吟行会を試みしました。毎年この日は例大祭で、「王の舞」「獅子舞」等が奉納され、一日中賑やかに神事が執り行われました。

麦の秋村幾曲り王の舞 倉谷ます美
鉦かざし新緑を舞ふ緋の衣 鶴田勝子
跳ね獅子の蚤取る仕草山笑ふ 中川雅月
真青なる空へ王の舞木の芽風 川口和代
王の舞大役つとめ春は行く 為永香月枝
王の舞里へと走る五月晴 橋本公枝
風薫る四肢しなやかに王の舞 中道千代江

○令和5年俳句協会主催「第62回全国俳句大会」

入選 小川軽舟 選

つちふるや暗くしづかに露人墓地 倉谷紫龍
予選通過作品

山菜莢や紙の女神の降りし里 倉谷ます美

○令和5年「万象」全国俳句大会

曾根 満 選

白山の峰より裾へ月今宵 川口和代

前田貴美子 選

壊れかけの魂揺るる仏桑花 川口和代

○令和5年秋季福井県総合俳句大会

五客 兼題の部入賞

夏潮の香をまないたに魚捌く 川口和代

特選 岡田有峰 選

斎田に乙女の跣足揃ひけり 鶴田勝子

○令和5年度芭蕉紀行第20回全国大会

コロナ禍で今年は4年ぶりの開催となり、当日投句93句、事前投句720句が寄せられ、吟行は氣比神宮、人道の港敦賀ムゼウムを訪れました。「万象」敦賀支部からは次の方が入賞。

敦賀市長賞

ユーカーに樹医の手立てや秋深し 中川雅月

敦賀市文化協会長賞

文字走る千畝の査証秋深む 鶴田勝子

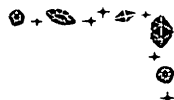
俳句協会福井県支部長賞

命のビザ寂光放つ秋の風 川口和代

今年も吟行をして仲間の句に学び、沢木先生が示される感動の中の美を見つけ出し、俳句作りに努力したいと思います。



ルビーの小函 (2月号)



「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったもののうちから、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

- | | |
|------------------------|------------------------|
| 6 郁子(むべ) | 27 日照雨(そばえ) |
| 7 金縷梅(まんさく) | 檻樓(ぼろ) |
| 9 錢五(ぜにご) | 28 螻蛄鳴く(けらなく) |
| *江戸時代の商人・錢屋五兵衛 | 千畝(ちうね) *外交官・杉原千畝 |
| 12 白帛(しらぎぬ) | 29 繙きて(ひもときて) |
| 讀んじて(そらんじて) | 嘎れ声(しゃがれごえ) |
| 13 轍(あかぎれ) | 秋微雨(あきつりり) |
| 14 五頭山(ごず) | 稱(ひつじ) |
| 惜なく(おしみなく) | 泊つ(はつ) |
| 15 嬰鑠(かくしゃく) | 煥(おき) |
| 鏝阿寺(ばんなじ) | 框(かまち) |
| 拙でて(ぬきんでて) | 絡繰(からくり) |
| 16 糶(せり) | 30 謚か(しずか) |
| 磧道(かわらみち) | 相方積み(あいかたづみ) |
| 17 狗尾草(えのころぐさ) | *琉球地方の石垣の積み方 |
| 海桐の実(とべらのみ) | 47 虫籠窓(むしこまど) |
| 潰えし(ついえし) | 48 六花(むつのはな) |
| 18 帶曲輪(おびくるわ) | 50 八咫烏(やたがらす) |
| 正睦(まさよし) | 忍野八海(おしのはっかい) |
| *堀田正睦・佐倉藩五代藩主 | 狩衣(かりぎぬ) |
| 突けば(つつけば) | 51 炊ぎつつ(かしぎつつ) |
| 千木(ちぎ) | 52 真砂女(まさじょ) *俳人・鈴木真砂女 |
| 19 乱歩(らんぽ) *小説家・江戸川乱歩 | 八十(やそじ) |
| 20 熟寝(うまい) | 54 霽るる(はるる) |
| 花甘藍(はなかんらん) | 榎の実(かやのみ) |
| 21 杜鵑草(ほととぎす) | 55 寸又峽(すまたきょう) |
| 22 皇子(みこ) | 秋声(しゅうせい) *小説家・徳田秋声 |
| 神名備(かんなび) | 56 余り裂(あまりぎれ) |
| 26 等伯(とうはく) *画家・長谷川等伯 | 60 木乃伊(ミイラ) |
| 27 小雪(しょうせつ) *二十四節気の一つ | 鞘堂(さやどう) |
| 灸(やいと) | |

北 南 西 東

消 息 等

内海良太名誉主宰、江見悦子主宰の句

「くちら」12月号に

子規の忌やまぐらの長き昼の寄席 良太

保己一忌版木の凸の黒黒と 悦子

「たかな」11月号に

青葉間書架に古事記と英字本 悦子

「初蝶」12月号に

水底を行きたる心地サングラス 悦子

「森」12月号に

びんと張る紺のシーツや星月夜 悦子

「伊吹嶺」12月号「現代俳句評」、大島知津

氏が江見悦子主宰の句を鑑賞

毎朝よ手すりつつつける寒鴉

日常生活の中で繰り返される行動をルーティンという。仕事やアスリートなども気分を切り替えて集中力を高めるために独自の行動を行うことがある。鴉は一年中見られる身近な鳥であるが、寒鴉というと寂しいイメージがある。

作者はある朝手すりをつつく鴉を見つけたのであろう。それ以来毎朝、手すりをつつく鴉を確認してしまうのではないだろうか。一見意味のない鴉の行動が毎朝続けられ、それを見ているうちに自身の一日を始めるルーティンのようになったのかもしれない。

ない。掲句の寒鴉には寂しいイメージはなく、むしろ今日一日を占うラッキーアイテムのように思われてくる。

「鶴」12月号「現代俳句を読む」に、谷

う子氏が中村千久編集長の句を鑑賞

ゆうらりと遠く長刀鉾来り

四年ぶり完全復活の祇園祭が行われた。

長刀鉾はくじ取らずと言って、必ず鉾の先

頭を行く、掲句の素晴らしさは「ゆうらりと遠く」にある。人混みの中、絢爛豪華な

長刀鉾の近づいて来るのを今か今かと待つ

ておられる。やがてひと際高い長刀鉾が辻

の端に見えてくる。「ゆうらり」とは担が

れた鉾の揺れのみならず、夢のような豪華

な、動く美術館の出現を目の当たりにした

感がある。京の町衆の心意気と努力で守ら

れてきた祇園祭。今年は動く美術館を見る

ため十五万人の人数があつたと聞く。

第38回国民文化祭 ななお「俳句の祭典」

事前投句の部 西田さい雪選

荒波とあうんの呼吸海苔をかく 松田好子

当日投句の部 村戸弥生選

本丸の石垣の中虫の声 成瀬貞紀子

第23回たんば青春俳句祭

細見綾子賞 選者賞 辻恵美子選

蚕豆を剥けば赤子の湿りかな 穂刈照子

細見綾子賞 入選

桑の実の終の一穎や綾子の忌 神田美穂子

種三つ描き朝顔日記終ふ 成瀬貞紀子

俳句ラリーの部 小鼓子賞 入選

杉玉を掲げて時雨の師弟句碑 成瀬貞紀子

第28回「草枕」国際俳句大会

インターネット投句部門入選

馬洗ふはたるの川の水かけて 丸本祥夫

第一回「俳人協会神奈川県支部」吟行会

波戸岡 旭（天頂）主宰）特選

重ね簾の肩の触れ合ふ陶器市 柳澤宗正

一月号追記

「俳人協会静岡県支部」俳句大会

三浦春子特選 甲斐遊系 秀逸

うつちやりに拍手総立ち草相撲 岩崎武士

甲斐遊系 秀逸

子役には袖に母付く村芝居 岩崎武士

曾根 満 秀逸

野仏の膝をしめらす落椿 杉澤 修

増田恵津子 秀逸

鍵穴を鍵もて探る十三夜 神田美穂子

和久田隆子 秀逸

麦秋へ大さ弧を描き身延線 神田美穂子

（報・編集部）

939-0364

射水市南太閤山 13
|
24

万象作品投句係行

84円切手を
貼ってください

〈通信欄〉

編集後記

▽ベルギーで暮らしていたころ、地元の人たちを交えてホームパーティーを開くことがよくありました。宴もたけなわとなると、話題は政治や国際情勢に及び、侃々諤々の議論が展開されたものでした。

日本では、宴席での政治の話は敬遠されがちですが、ヨーロッパでは政治は生活そのもの。政治の話が出来るのは大人の証といった感じでした。

この国の政治や経済の劣化をみせつけられてきた昨今、新たな春を迎えて、主権者としての意識をしっかりと心したいと改めて思うことしきりです。青臭いですか？

(千久)

▽長年付き合ひのある友人夫婦3組で毎年正月に成田詣に出掛けますが、今年は2月に。初詣とは名ばかりで、男たちは鰻重が目的。参道で奈良漬や酒粕を買い、雑貨屋を除くのも楽しみ。形ばかりのお参りで今年一年のご利益を願うのは図々しすぎますね。(規子)

▽大雪の今日気温は20度、10月の陽気だった。異常気象は地球全体で深刻化している。暖冬は有り難いが、今年の酷暑には閉口した。暖冬の影響で今日スーパで菜の花が一把98円だった、喜んでばかりはいられない。

(美穂子)

▽小田急線に「梅ヶ丘」という駅がある。その近くの羽根木公園の一角に梅林があり、2月に梅祭がある。しかし、ここに梅が植えられ始めたのは昭和42年から。その前は「根津山」と呼ばれ雑木林と野菜畑があったはず。子どもの頃の遊び場の名が消え、何かを失ったように今も思っている。(宏子)

▽今、あちこちの神社や植物園で菊展が開催されている。出品されている菊は色も形も美しく、丹精込めて育てあげた作者の思いが伝わる。しかし、その美しさはなぜか心に残らない。

そして、大輪の菊を支えている支柱がなぜか気になる。自分で立てない菊だからだろうか？

(清晴)

会員を募ります

会員は左記の会費(誌代)を前納していただきます。

一年分 一二,〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座 00230・0・103581

万象俳句会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10 塗木翠雲

万象 二月号

第二十二巻 第十一号

通巻 第二六三号

令和六年二月一日 発行

主宰 江見悦子

発行人 江見悦子

編集人 中村千久

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東一 三二一六 603

万象 発行所

☎三六三二四一五七九六

万象

第二十二卷

第十一号（通卷二六三号）

平成十四年十一月十三日
令和六年二月一日発行

第三種郵便物認可
（毎月一回一日発行）